福岡市埋蔵文化財調査報告書第851集

博多（はかた） 105

── 博多遺跡群第145次調査報告 ──

2005

福岡市教育委員会

巻頭カラー 1. 高麗青磁

巻頭カラー 2. 鍔

巻頭カラー 3. 墨書土器

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が多く残されており、これを後世に伝え残していくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の都市部周辺における開発事業の増加に伴い、止むを得ず失われていく埋蔵文化財の発掘調査を実施し、失われていく遺跡の記録保存に努めているところであります。

本書は、博多遺跡群第145次調査の成果を報告するものであります。本調査では古墳時代から中世にかけての集落遺跡の一部を調査し、博多遺跡群の全容を知る上での多くの貴重な成果をあげることができました。本書が、市民の皆様の文化財に対する理解を深めていく上で活用されると共に、学術研究の分野でも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、様々なご協力を賜りました岡部ハウス株式会社、株式会社サンクリエートの皆様をはじめ、多くの方々のご協力とご理解に対し、心からの謝意を表します。

平成 17 年 3 月 31 日

福岡市教育委員会
教育長　植　木　とみ子

例　　言

1. 本書は、福岡市博多区御供所町 313-2 おける共同住宅建設工事に先立って、福岡市区教育委員会が平成 15 年度（2003 年度）に実施した博多遺跡群第 145 次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆・編集には本田浩二郎があたった。
3. 本書に使用した遺構実測図・遺物実測図は本田が作成し、製図した。
4. 本書の遺構実測図中に用いている方位は、すべて磁北であり、真北より 6° 21′ 西偏している。なお、本書に使用している座標は、国土座標第Ⅱ系を用いている。
5. 遺物実測図の縮尺は土器類を 1/3 に、銅銭を 1/1 に、金属製品等は 1/2 の縮尺に統一した。
6. 検出した遺構については、調査時に検出順に通し番号を付した。
7. 銅銭・銅製品・金属製品・墨書土器については、福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎が処理と整理の一部を行った。
8. 本書で使用した遺構写真は本田が撮影し、遺物写真については力武卓治が撮影した。
9. 本調査に関わる記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理・公開される予定であるので、活用されたい。

本文目次

博多遺跡の立地と環境 …… 1

第一章　はじめに …… 3
　(一)調査にいたる経緯 …… 3
　(二)調査体制 …… 3

第二章　発掘調査の記録 …… 4
　(一)調査の概要 …… 4
　(二)基本層序 …… 5
　(三)遺構と遺物 …… 7
　　1. 各遺構面の概要 …… 8
　　2. 井戸 …… 16
　　3. 土坑 …… 26
　　4. その他の出土遺物 …… 40
　　a. 遺構出土遺物 …… 40
　　b. 包含層出土遺物 …… 40
　　c. 墨書土器 …… 45
　　d. 銅銭 …… 50

第三章　まとめ …… 52

表紙　　墨書土器・土師器坏
裏表紙　　獅子瓦

博多遺跡の立地と環境

博多遺跡群は、中世都市「博多」を主として、弥生時代から近世、さらに近現代まで続く複合遺跡である。地理的には、玄界灘に面する博多湾岸に形成された砂丘上に位置し、西を博多川(那珂川)、東には江戸時代に開鑿された石堂川(御笠川)、南は石堂川開鑿以前に那珂川に向かって西流していた旧比恵川(御笠川)によって画されている。

博多遺跡群内での遺構の初現は、弥生時代中期前半の集落・甕棺墓である。これらの遺構群が検出される範囲は遺跡群の南半部に集中し、後期以降も永続的に存続する。

古墳時代にはいると砂丘面上に集落が広範囲に展開し集住が始まり、前方後円墳や方形周溝墓などが出現する。5世紀代には集落は縮小し、墳墓のみが点在する傾向を見せるが、6世紀代には竪穴住居の検出数は増加し、集落は再び盛行を見せる。

律令時代にはいると、御笠川の最上流地域に大宰府が設置され、九州の政治･軍事的中心地となる。また、博多湾岸には、博多遺跡群と入り海ひとつ隔てた西の丘陵上に、対外交渉の拠点として鴻臚館が置かれた。博多遺跡群内に官衙そのものが設置されたという文献記録はないが、石帯･銅製帯金具･墨書須恵器・須恵器硯・皇朝銭・鴻臚館式瓦・老司式瓦などの特殊な遺物が出土し、東西・南北方向の溝が方一町の規格性をもって掘削され、律令官人とそれに伴う支所施設等の存在が推定される。

平安時代後期になり律令体制が弛緩すると、対外貿易に管理も中央政府の直接的な管理・掌握から、大宰府を通じての管理に変質し、大宰府官人による蓄財のための私貿易の拡大をもたらす。このような時勢の流れの中で、11世紀には博多において宋商人らの居留が本格的に始まる。博多遺跡群が本格的に繁栄・展開するのは11世紀後半に入ってからで、埋め立てによる居住域の拡大が開始され、該期の膨大な量の輸入貿易陶磁器などが出土することから流通形態が確立した時期と考えられている。

さらに、12世紀末から13世紀前半にかけては、聖福寺・承天寺が博多在住の宋商人綱首の援助のもとに、相次いで建立され周辺の都市化が急速に進行し、遺跡縁辺では筥崎宮周辺に展開する箱崎遺跡や住吉神社遺跡と共に中世都市群として有機的に発展したことが調査成果より知られている。

鎌倉時代には、二度にわたる元寇で博多付近一帯は戦場となり一旦は荒廃するが、13世紀末には鎮西探題が博多に設置され、博多は貿易の中心地だけでなく、九州の政治的中心地という役割を持つようになる。調査成果から13世紀末から14世紀初めにかけて、道路遺構が各調査地点で確認されており、それらは戦国期まで存続することが分かっている。これらの道路・街区は必ずしも統一された規則性を持つわけではないが、中世後半期の博多の都市景観はここに確立されたといえよう。

室町時代後半の博多は堺と並んで自治都市として有名であったが、度重なる兵火によって焼亡している。この時期に博多遺跡群南端には房州堀が設けられ、1586年には中国の毛利氏の軍と対峙した薩摩の島津氏によって焼かれ灰燼と帰する。しかし、翌年には豊臣秀吉によって復興される。これが太閤町割であり、この時点で鎌倉時代以降続いていた博多の街区・道路のほとんどは廃止され、博多全体は長方形街区と短冊形地割で再整備され、中世都市博多は近世都市博多として再生された。江戸時代の鎖国政策で貿易都市としての博多は幕を下ろし､商人町博多として明治維新を迎えたのである。

昭和52年の高速鉄道（地下鉄）の調査より始まった博多遺跡群の発掘調査は、平成17年3月現在、第151次調査（地下鉄・築港線を含めると185次）を数える。公共事業を原因とする大規模な開発から民間主導の小規模な開発へと転換期を迎えているが、中世都市「博多」は破壊と引き換えに当時の様相を着実に明らかにしつつある。

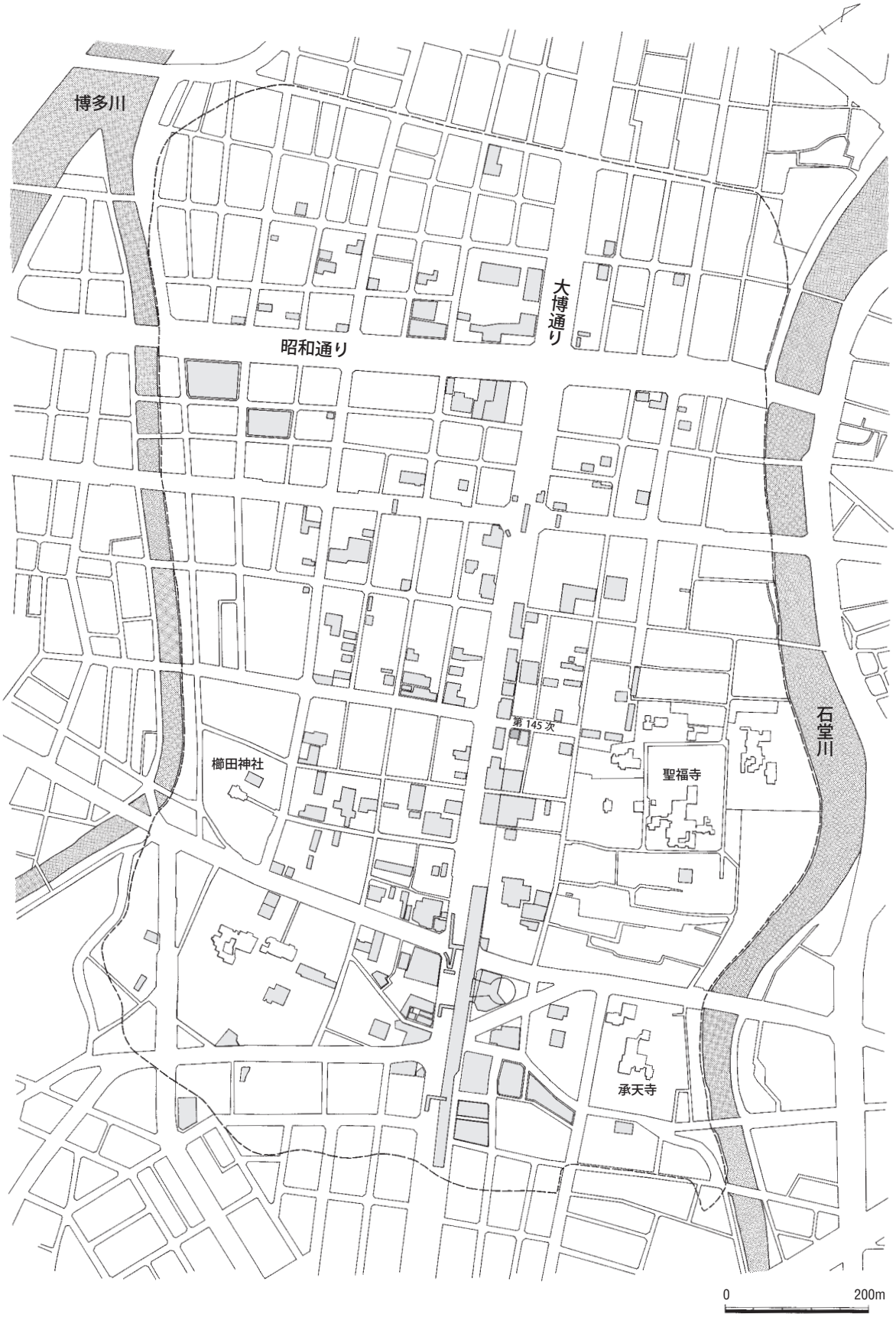


Fig.1　博多遺跡群内調査区位置図（S＝1／8000）

第一章　はじめに

（一）調査にいたる経緯

平成14年10月10日、岡部ハウス株式会社より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、博多区御供所町313-2地内における共同住宅建設予定地内に関しての埋蔵文化財事前審査願が提出された。申請地は周知の遺跡である博多遺跡群の中央部に位置しており、申請地の周辺では数次の発掘調査がこれまでに行われており、申請地内においても良好に遺構が存在していることが推測された。これを受けて埋蔵文化財課は平成14年10月25日に現地での試掘調査を行った。その結果、現地表面から150cmほど掘り下げた暗灰褐色土層面上において中世から近世にかけての井戸、土坑などの遺構を伴う黄褐色粘質土による整地層と該期の遺物の存在を確認した。これらの遺構は濃密に遺存しており、建設工事に伴う基礎工事によって遺跡の破壊は免れないため、工事によって止むを得ず破壊される部分については全面に発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行うこととなり、平成15年9月3日に着手し、同年12月5日に終了した。

（二）調査体制

調査委託	岡部ハウス株式会社		代表取締役	岡部　ルミ子
	サンクリエート株式会社		代表取締役社長	西本　光男
調査主体	福岡市教育委員会	教育長		生田　征生（前任）
				植木　とみ子（現任）
調査総括	同	文化財部	部長	山崎　純男（現任）
	同	埋蔵文化財課	課長	山口　譲治（現任）
	同	埋蔵文化財課	第２係長	池崎　譲二（現任）
調査庶務	同	文化財整備課		御手洗　清（現任）
調査担当	同	埋蔵文化財課	事前審査係	田上　勇一郎（試掘調査）
				久住　猛雄（現任）
			第２係	本田　浩二郎（本調査）

調査作業	阿部　幸子	池　　聖子	石川　君子	大音　輝子
	大庭　智子	小池　温子	小路丸嘉人	小路丸良江
	永田　優子	永田　律子	中野　裕子	村崎　祐子
	夏秋　弘子	寺園恵美子	増田ゆかり	吉川　暢子
	金子　二三枝	幸田　信乃	塚本よし子	薗部　保寿
整理作業	有島美江　　室　以佐子　　鳥尾安子			

遺跡調査番号	0342	遺　跡　略　号	ＨＫＴ145
調 査 地 地 番	福岡市博多区御供所町313-2	分布地図番号	千代・博多48
開　発　面　積	253,98㎡	調　査　面　積	250㎡
調　査　期　間	2003,09,03～2003,12,05	調　査　原　因	共同住宅建設

調査期間中には多田建設株式会社の方々に多くの配慮を賜った。記して感謝申し上げる次第である。また福岡市教育委員会埋蔵文化財課の同僚諸氏からは多くの助言を頂いた。深く感謝する。

第二章　発掘調査の記録

（一）調査の概要

博多遺跡群は、福岡平野北側の博多湾岸に位置し、那珂川と御笠川（石堂川）の河口に挟まれた三角州平野上に形成された遺跡群である。博多遺跡群の立地する砂丘地形は、南から大きく「博多浜」と「息浜」（おきのはま）の二つに分けられ、「博多浜」はさらに二つの砂丘から形成される。現在の「博多」の街並みは、この砂丘地形上に人工的な整地層が2ｍ程度盛り土されて形成されたものであるが、現状でも埋没した旧地形の起伏を比較的よく反映していることが、これまで行われた発掘調査の成果より判明している。

今回報告を行う、博多遺跡群第145次調査地点は遺跡範囲のほぼ中央に位置しており（Fig-1）、調査区の現状は駐車場であった。試掘調査の成果では現地表面から140cmほど掘り下げた暗灰褐色土層面上で遺構が検出されており、これに基づいて調査着手以前に近代から現代までの整地層を調査区外に掘削・搬出し、遺構検出を開始した。なお、調査地点の現地表面の標高は6.40ｍ前後である。

発掘作業は排土を場外へ搬出する工程上の都合から、大博通りに面する東側約60㎡分については一部調査を断念し、第3・4面のみ調査を行った。また、博多遺跡の基盤層である砂丘面までの深度が5ｍ以上と深く、調査区周囲には鋼矢板による土留め支保工が施されており、安全対策上の理由から壁面に接して検出された井戸などの遺構は一部を除き完掘は行ってない。

調査では、古代の土坑を初現として、中世の廃棄土坑や井戸遺構、不定形土坑、柱穴群などの遺構と数cm単位で行われた整地土層面を検出した。古代以前の遺構については中世の井戸掘削によって攪乱・消失しているものと考えられ、本調査区内での検出はなかった。

遺物は弥生土器、古式土師器、須恵器、土師器、緑釉陶器、瓦器、貿易陶磁器、国産陶器、銅銭、獣骨、刀子・鉄製紡錘車等の金属製品などがコンテナケース230箱分が出土している。

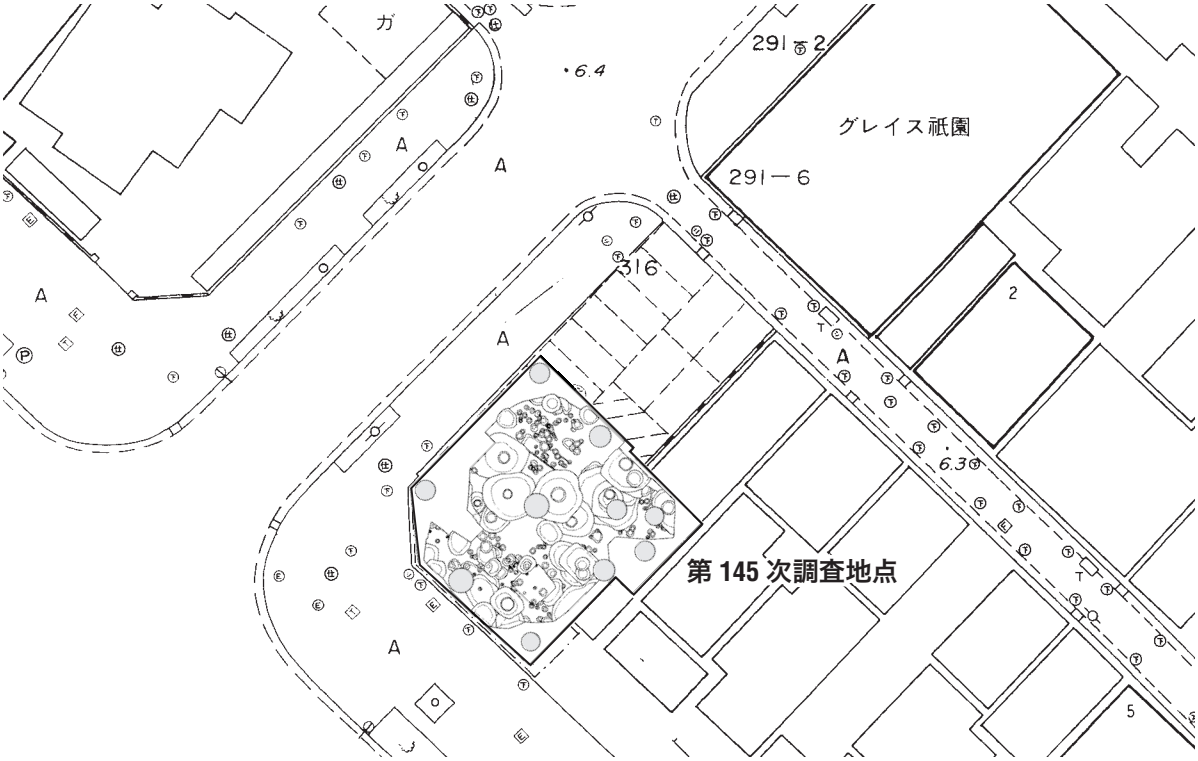


Fig.2　調査区位置図（S＝1／500）

（二）基本層序（Fig-4）

第145次調査地点は、博多遺跡群が立地する砂丘の南側列（博多浜）上に位置している。正確には南側砂丘列は更に二つの砂丘に分けられ、本調査区はこの内の北側砂丘上に位置する。

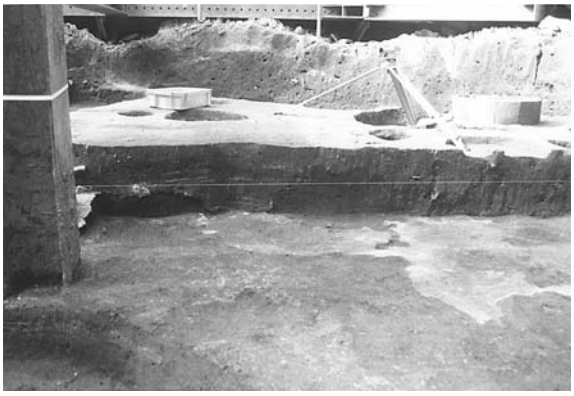
これより報告を行う各遺構面の他にも複数の整地面が確認されたが、調査では主要な遺構の検出が予想された1～4面の遺構面を試掘調査の成果に基づき設定し、各整地面は土層断面上で記録するに留めた。整地は標高3.0m地点の第3面直上から第1面とした標高5.0m付近まで確認され、黄灰褐色土・灰黄色土・黄褐色土などを用いて行われている。厚さ1～5cm前後の単位で丁寧に行われており、炭化物層を数枚挟んでいる状況が確認できた（Fig-3参照）。これらの整地層は主に調査区の北側半分で検出されるが、南半部ではほとんど確認できない。井戸遺構等の大きな掘削によって消失しているものとも考えられるが、空間利用の目的差の結果である可能性もあろう。

本調査地点の現地表面の標高は6.40m前後を測り、博多浜北側のほぼ頂部中央部に位置する。調査地点の現状は駐車場で、標高5.0m付近の第1面までは黒灰色砂質土の近代整地層が堆積する。

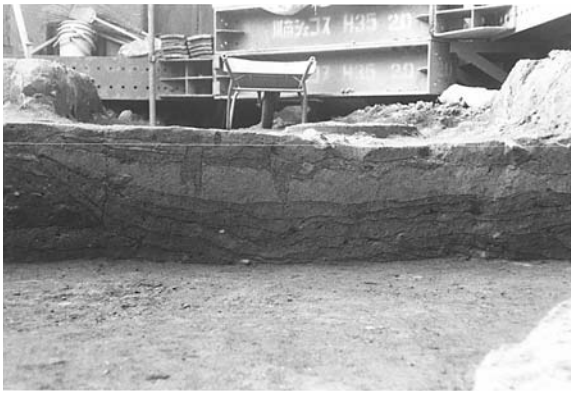
申請地のほぼ中央部で行われた試掘調査の成果より、第1面は標高5.0m前後の黄灰褐色粘質土の整地土層面上で設定した。

第2面は標高4.0m前後で検出される暗灰褐色粘質土～暗褐色砂質土層面上で設定した。調査区の北側部分では整地層面上で明確に遺構を検出することができたが、南半部では井戸の掘方により遺構の多くのが消失しており、遺構埋土と整地層を平面的に検出したのみである。

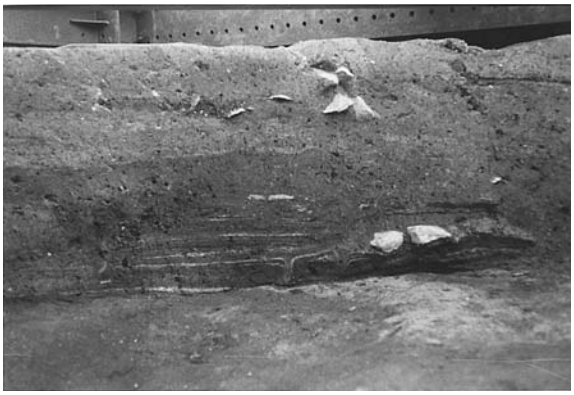
第3面は標高3.0～3.5m前後の暗褐色砂質土層面上で設定した。遺構面は北側に緩やかに傾斜しており、基盤層である褐色砂層面の地形を反映していることが判明した。



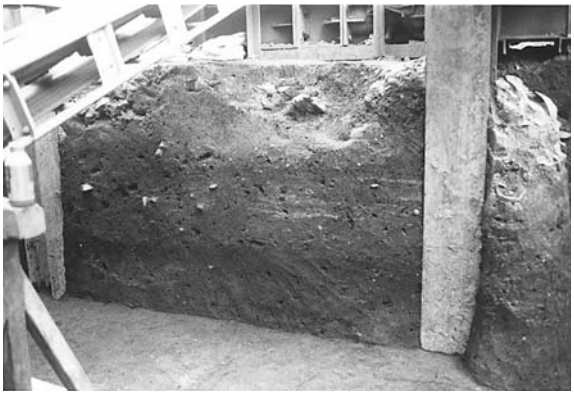
Ph.1　調査区土層断面（南東から）



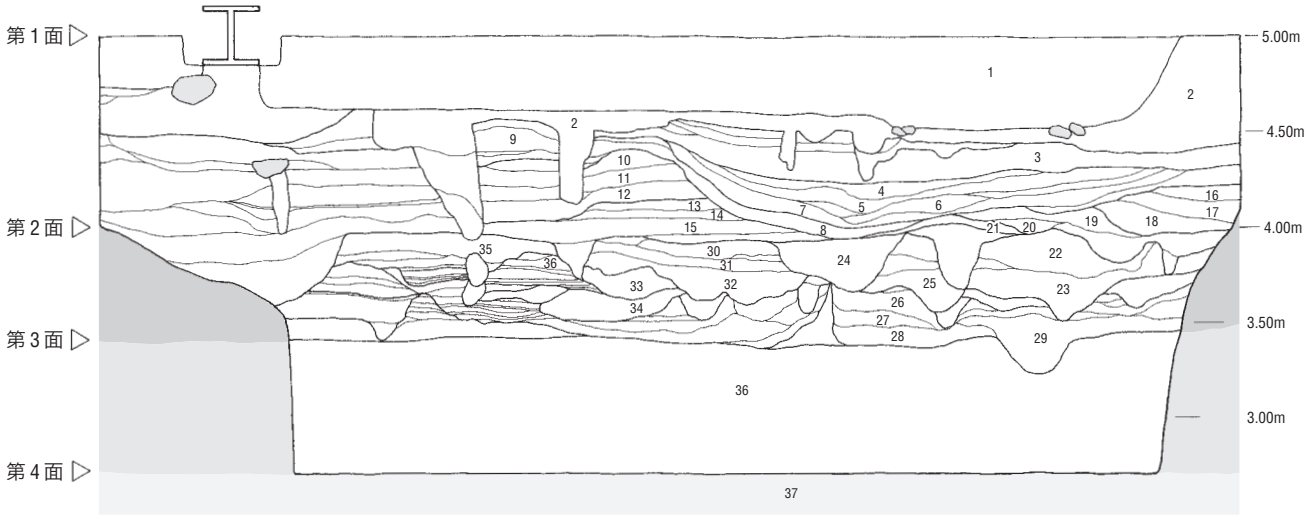
Ph.2　調査区土層断面（南東から）



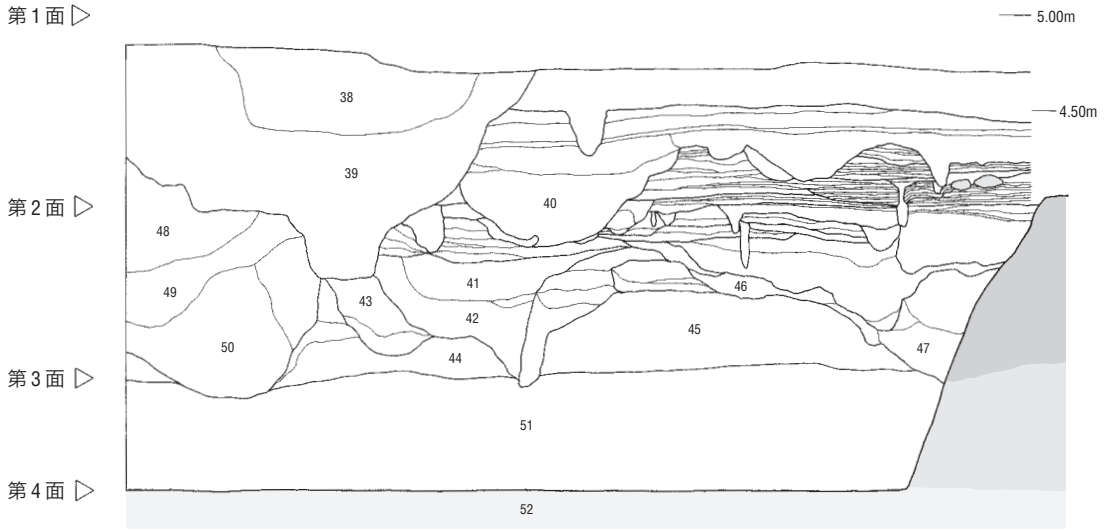
Ph.3　調査区土層断面（北東から）



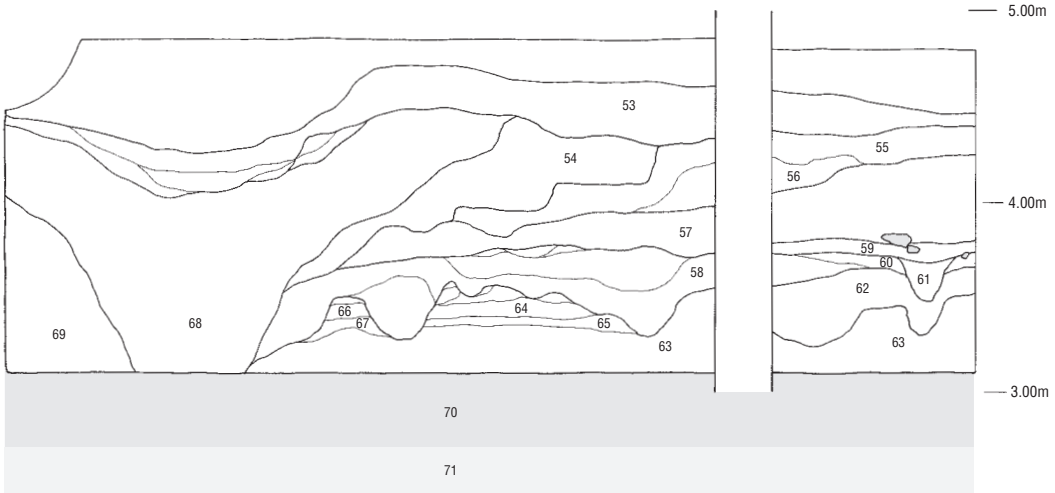
Ph.4　調査区土層断面（北から）



土層断面実測図 1



土層断面実測図 2



土層断面実測図 3

調査区土層断面図注記
1. 整地層、焼土・炭化物を含む
2. 暗褐色土
3. 暗黄褐色土
4. 暗黄灰褐色砂質土
5. 暗灰褐色土
6. 暗褐色砂質土
7. 暗黄灰褐色砂質土
8. 暗灰褐色砂質土
9. 暗黄褐色砂質土
10. 暗灰褐色砂質土
11. 暗灰褐色土
12. 暗褐色土＋暗黄褐色土
13. 暗黄褐色砂質土＋焼土
14. 暗黄褐色砂質土＋炭化物
15. 暗褐色土、焼土・炭化物を含む
16. 暗黄褐色土
17. 暗褐色土
18. 暗黄褐色砂＋暗褐色土
19. 暗灰褐色土
20. 暗灰褐色砂質土＋焼土
21. 暗褐色粘質土
22. 暗黄灰褐色砂質土
23. 暗灰褐色土、炭化物含む
24. 暗灰褐色砂質土(SK-083埋土)
25. 暗褐色土＋焼土
26. 暗灰褐色砂質土
27. 暗黄灰褐色砂質土
28. 暗褐色砂質土＋焼土
29. 暗灰褐色砂質土＋鉄分沈着土
30. 暗黄灰褐色粘質土
31. 暗灰褐色砂質土
32. 暗黄灰褐色土
33. 暗黄灰褐色砂質土＋鉄分沈着土
34. 暗褐色砂質土
35. 暗褐色粘質土
36. 暗褐色砂
37. 褐色砂(基盤層)
38. 黒灰色粘質土(遺構埋土)
39. 黒褐色粘質土＋炭化物
40. 暗褐色土＋焼土・炭化物
41. 暗黄褐色土＋焼土
42. 暗褐色砂質土
43. 黒灰色土
44. 暗褐色砂質土＋焼土
45. 暗褐色砂質土
46. 褐色粗砂
47. 褐色砂
48. 暗褐色砂質土
49. 暗褐色土＋焼土
50. 暗褐色砂質土＋焼土
51. 暗褐色砂(古代包含層)
52. 褐色砂(基盤層)
53. 暗黄褐色土
54. 暗褐色土＋暗黄褐色粘質土
55. 暗黄褐色土
56. 暗黄褐色土＋焼土・炭化物
57. 暗褐色土＋焼土・炭化物
58. 暗褐色砂質土
59. 暗茶褐色土
60. 暗褐色土＋炭化物
61. 暗黄褐色砂質土
62. 黒灰色砂質土
63. 暗褐色砂＋焼土・炭化物
64. 暗黄褐色砂
65. 暗褐色砂
66. 黒灰色土
67. 暗黄褐色砂質土
68. 暗褐色土＋焼土・炭化物
69. 暗褐色砂質土
70. 暗褐色砂(包含層)
71. 褐色砂(基盤層)

Fig.3　土層実測図(S＝1／40)

この第3面とした暗褐色砂質土層は古墳時代から中世初頭の遺物を多量に含む包含層でもあり、掘り下げ時には多量の須恵器・土師器・貿易陶磁器などの遺物が出土した。復元地形より調査区南側からの流れ込んだ遺物と考えられる。

第4面は標高2.7～3.1ｍ前後で検出された博多遺跡群の基盤層である褐色砂層面上で設定した。第3面と同じく北側に向かって緩やかに傾斜しており、調査区が砂丘北側の緩斜面上に位置することが分かる。これまで行われた周辺の調査成果（102次・107次・120次調査）より、調査区北側には埋没した谷地形が存在していることが知られており、今回の調査成果もこの谷地形の存在を裏付けるものである。本調査区内では谷の堆積層自体は確認されておらず、谷頭の南側付近に位置しているものと想定される。なお、本調査地点での涌水は、近辺の調査区と同様に基盤層である褐色砂層から2ｍほど掘り下げた標高1ｍ前後の地点で認められた。

（三）遺構と遺物

調査区は前述のように安全対策上周囲を鋼矢板で囲み、これに支保工を設置して行われた。支保工下部には既に打設された基礎杭が存在している部分もあるため、調査区壁際の杭周辺は調査を断念し、調査区西側については場外へ持ち出す排土置き場確保のため第1面と第2面の調査を行っていない。この排土置き場とした拡張区については、排土搬出時に遺構検出作業のみを行い、平面形を把握できた遺構についてのみ図面で記録するに留めた。また、調査区と拡張区の間に残された幅2ｍ程度の土層は拡張区調査時に順次掘り下げを行い、各土層ごとに遺物の取り上げを行った。

各遺構面の調査後は、試掘調査の成果と調査時に行ったトレンチでの土層観察により遺構面を設定し、順次掘り下げを行っている。各遺構面とした層位も各時期の遺物を多く含む遺物包含層となっており、掘り下げ時には多量の遺物が出土した。大別して第1面下掘り下げ時には中世後半期、第2面下掘り下げ時には中世前半期、第3面下掘り下げ時には古墳時代から古代にかけての遺物が出土しており、各遺構面の時期と包含層形成時期を把握する上で重要な資料である。

本調査での遺構の初現は第4面検出の古代の土坑（SK-321）であるが、遺物としては弥生土器甕の小破片が数点出土している。なお、本調査区東側で行われた第88次調査では、褐色砂層面上で弥生時代後期後半の甕棺墓3基が検出されており、この時期から生活領域として利用されていたことが分かる。

以下に各遺構面と検出された遺構についての説明を行う。

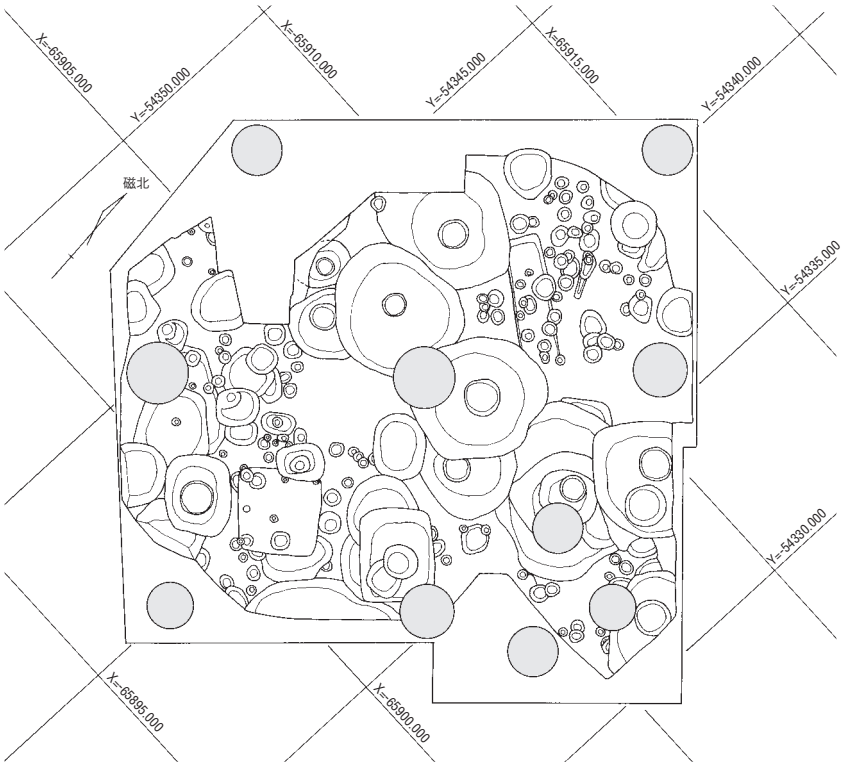


Fig.4　調査区位置図（S＝1／200）

１．各遺構面の概要

ａ．第１面の調査（Fig-5）

第1面は標高5.0ｍ付近で検出される黄灰褐色粘質土の整地層面上で設定した遺構面である。試掘成果に基づいて設定された遺構面であり、遺構面の時期としては概ね15世紀代と考えられる。

第1面での遺構検出は黄灰褐色土の整地層面（1面－1）を鍵層として行ったが、1区南側では黄灰褐色土による整地土層面は検出されず、部分的に下層の黄褐色粘質土による整地層面を検出しており、その整地面上において遺構検出・掘り下げを行った。なお、第1面とした遺構面直上には支保工が碁盤状に設置されていたため、鉄骨直下の遺構の調査は断念した。また、支保工支持のため鋼矢板に設置された金具付近は、取り付け作業のため一部掘り下げられており、この部分については遺構が消失していたため遺構検出などの作業は行っていない。調査に先行して打設された建物基礎杭は直径1.2～1.8ｍ前後であるため、この部分(計9本分)については調査対象範囲から除外している。

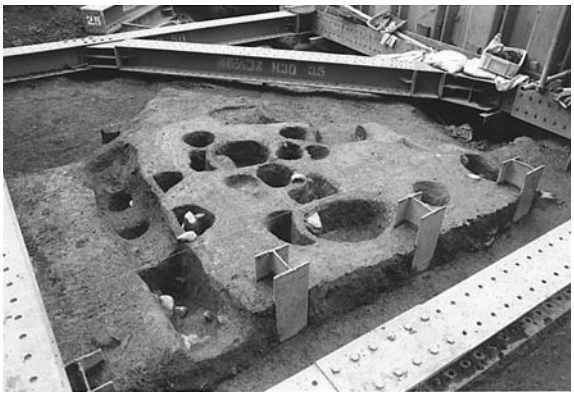
第1面では、土坑・溝状遺構・建物基礎状遺構などの遺構を検出した。これらの遺構の中には現在の街区方向と同方向の主軸を持つものがある。この現在の「博多」の街並みは基本的には太閤町割によって整備された街区を踏襲したものであり、16世紀末以降現代まで続く景観である。第1面で検出さ

Fig.5　第1面遺構実測図（S＝1／100）

れた、これ以前の遺構は聖福寺主軸線を基準とした方位を採るものが多い。

検出された土坑の多くは埋土中に拳大の礫を多く含んでいる。SK-009・SK-010・SK-011・SK-015等であり、埋土中より土師器・陶器などの遺物が出土する。建物基礎状遺構としてはSK-052・SX-066等がある。SK-052は直線的に礫が配置され、その延長上にSX-066が検出される。SX-066は建物角部に位置すると考えられ、クランク状に配された礫が検出される。これらの遺構の主軸はN-53°-W前後もしくはこれに直交する方向を採る。該期の区画を示す遺構である溝状遺構もほぼこの方位に沿う形で検出されており、太閤町割直前の街区を指し示すものであろう。

Ph.5　第1面調査状況（北から）



Ph.6　第1面調査状況（北東から）

Ph.7　第1面調査状況（北西から）

Ph.8　SX-066検出状況（南から）

Ph.9　第1面調査状況（南東から）

Ph.10　SK-011検出状況（南東から）

b．第２面の調査（Fig-6）

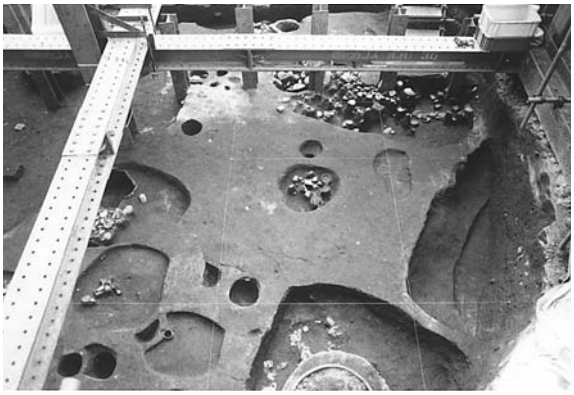
標高4.0ｍ前後の暗褐色粘質土による整地層面で設定した遺構面で、土坑・柱穴群・溝遺構などの遺構を検出した。遺構の概ねの時期は14世紀代である。調査区の北半部では前述の暗褐色粘質土整地層面上で明確に土坑などの遺構を検出することができたが、調査区中央部から南半部にかけては井戸数基が切り合って存在しており、井戸掘方によって遺構の多くが消失している状況であった。

第2面では、廃棄土坑・方形土坑・井戸などの遺構を検出した。廃棄土坑としては、SK-080・SK-081・SK-092・SK-093等が調査区北側に集中して検出された。これらの遺構が検出された箇所は特に良好に整地層が遺存していた位置であり、屋敷地内という生活空間の中でも用途が限定されていた場所であった可能性が考えられる。これらの土坑には土師器小皿・坏が一括廃棄されており。埋土には焼骨･焼土･炭化物が多く混入し、これらの土坑壁には厚さ数cmの鉄分沈着層が形成されていた。この他にはSX-101・SX-107が検出された。遺構としての遺面形は不明瞭であり、本来は同一の遺構である可能性が考えられる。同一の遺構であれば、Ｌ字形の建物を巡る溝状遺構であったものか。両遺構内にも多量の土師器小皿・坏が廃棄されていた。SX-107内には形代と考えられる刀子・鉄鏃や

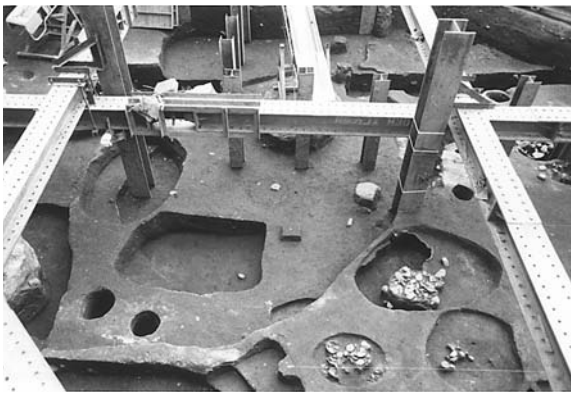
Fig.6　第2面遺構実測図（S＝1／100）

銅銭も同時に廃棄されており、廃棄に際して行われた特別な饗宴が想定される。調査区南東側で検出されたSK-114は平面形が長方形を呈する土坑である。その主軸はN-61°-W方向を採り、復元される聖福寺門前町の街区方向とほぼ同一のものとなる。井戸遺構は、第2面において掘方が検出されるものがあり、その多くが14世紀代に属する。一部の井戸（SE-125・SE-225）は掘方埋土上に黄褐色粘質土による丁寧な整地を行っているものもある。排土置き場とした拡張区については、排土搬出時に遺構検出のみを行った。拡張区北半部では、SK-114等と同方向の主軸を採る遺構掘方を確認した。第2面から第3面への掘り下げ時には、多量の遺物が出土した。この中でもガラス製の武具飾り具や鍔等の遺物が注目される（Fig-56参照）。

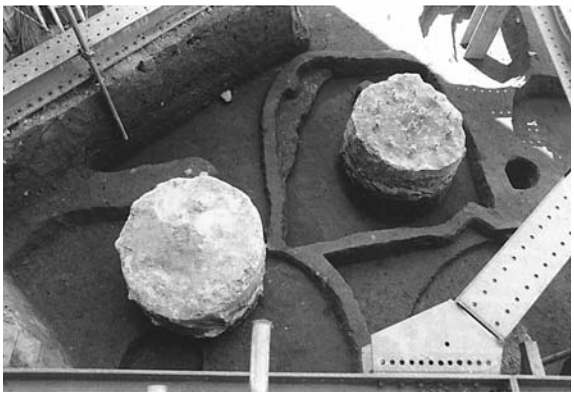
Ph.11　第2面調査状況（西から）



Ph.12　第2面調査状況（北東から）



Ph.13　第2面調査状況（北東から）



Ph.14　第2面調査状況（北東から）

Ph.15　SK-096遺物出土状況（北東から）

Ph.16　SK-080遺物出土状況（北東から）

c．第３面の調査（Fig-7）

標高3.0～3.5ｍ前後で検出される暗褐色砂層面上で設定した遺構面である。緩やかに北側に傾斜する遺構面で、新たに検出した遺構として井戸・廃棄土坑・方形土坑・建物としてまとめられない柱穴群などがある。第3面は第2面からは約50cmほど掘り下げた面で、上面では検出できなかった井戸（SE-119・SE-120・SE-186・SE-190）などを新たに確認し掘り下げを行った。なお、井戸は掘方が長方形・円形の二形態が混在する。調査区南側で検出される長方形の掘方を持つ井戸（SE-125・SE-300）は、主軸をほぼ同一方向のN-45°-Wを採るが、両井戸遺構には時期差があり、他の井戸遺構とは時期的な構造差では説明できない異なる性格が考えられる。

調査区北側で検出された方形土坑（SK-160・SK-169・SK-174）は同一方向の主軸を採るが、出土遺物が少なく用途・性格については不明確な点が多い。これらの土坑はいずれも暗褐色砂質土の埋土でほぼ垂直な壁を持ち、検出面から土坑底面までの深さが25cm前後で底面は平坦となる。新たに検出された廃棄土坑（SK-126・SK-180・SK-182）は白磁主体の遺構で、ヘラ切り・糸切りの土師器小皿・坏が混在した状況で出土しており注目される。

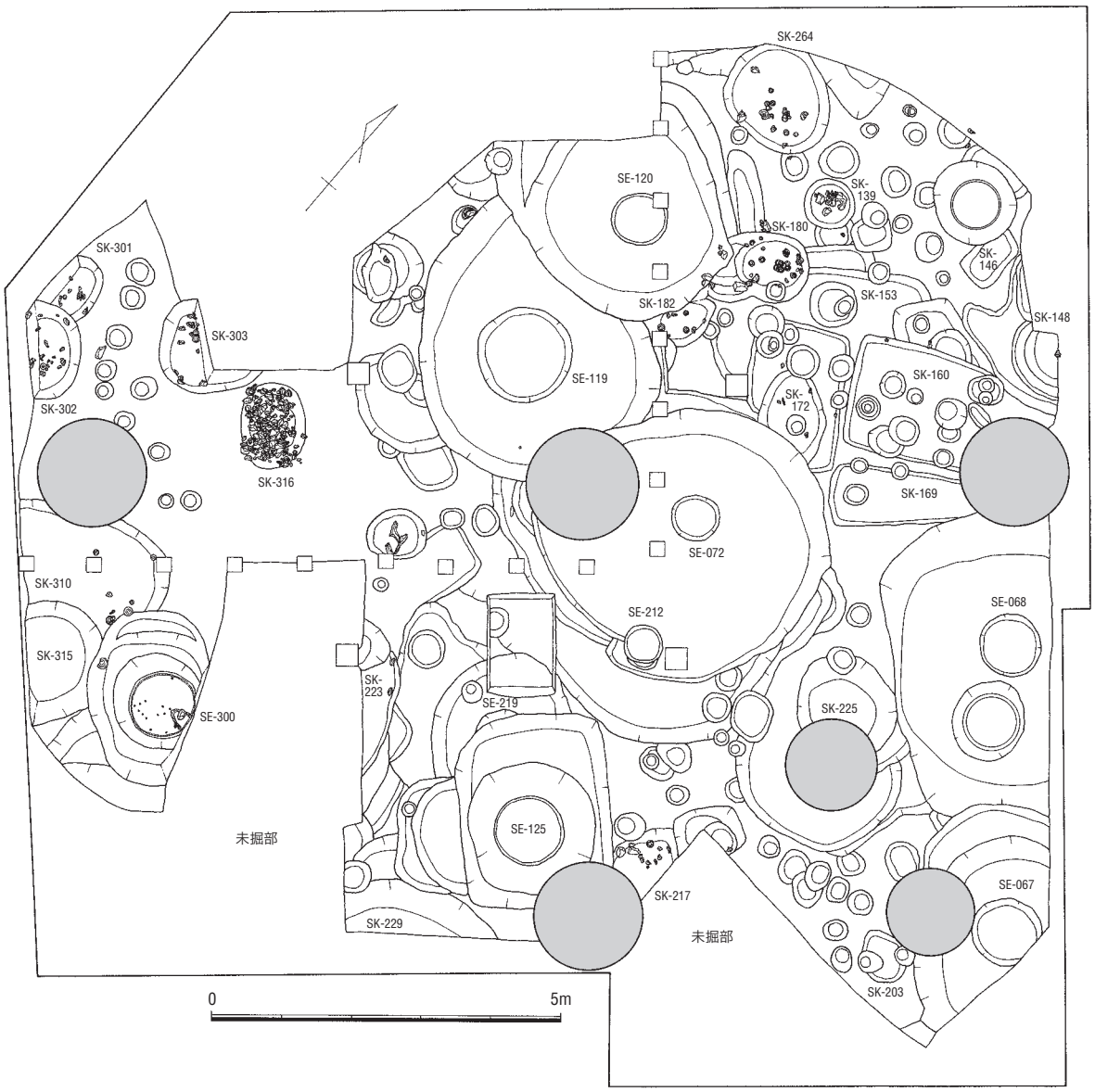
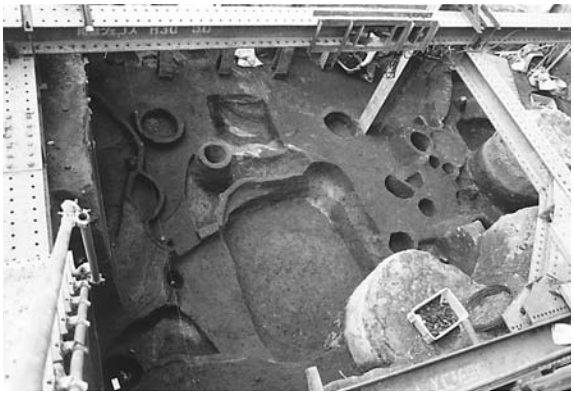


Fig.7　第3面遺構実測図（S＝1／100）

第3面からは排土が場内処理可能となったことから、拡張区についても遺構の調査を行った。拡張区では井戸・土坑・柱穴群などの遺構を検出した。検出した廃棄土坑SK-303からは、軒丸瓦とともに獅子瓦（Fig-42-264）や猿面を模した墨書土器（Fig-60-510）等が出土した。これまでの博多遺跡群内の調査では出土していない形態の瓦であり、類例の増加が待たれる。猿面墨書土器は顔面を赤色顔料と墨書で彩色しており注目される資料である。この他には、拡張区第3面までの掘り下げ時に高麗青磁碗高台部（Fig-56-381）などの遺物が出土している。

第3面検出遺構の時期は、出土遺物より概ね11世紀末から13世紀後半の年代が考えられる。

Ph.17　第3面調査状況（南から）



Ph.18　第3面調査状況（南から）

Ph.19　第3面調査状況（北東から）

Ph.20　第3面調査状況（北東から）

Ph.21　SK-182遺物出土状況（北西から）

Ph.22　SK-180遺物出土状況（南東から）

d．第４面の調査（Fig-8）

標高2.7～3.1ｍ前後で検出される褐色砂層面上で設定した遺構面である。遺構の大半は上面から掘削された井戸遺構などで、第4面で新たに検出された遺構としては土坑・柱穴などがある。遺構面時代の年代は概ね古代以前の時期と考えられる。

上面から検出されていた井戸遺構については、第4面で井筒までの完掘を行った。瓦井戸以外の井戸11基はすべて桶を井筒として転用していた。遺存状態不良のものは壁面に桶やタガの圧痕が残るのみである。SE-072・SE-300の井筒からは廃絶時祭祀に際して投棄された銅銭や鉄製紡錘車・剃刀等の鉄製品などが出土した。

第4面で新たに検出した土坑はSK-321・SK-329・SK-337などである。SK-321とした方形土坑は古代の時期が考えられる遺構で竪穴住居である可能性が考えられる。周辺の調査区では古代の竪穴住居・溝状遺構などの集落の一部が検出されているが、本調査区においても平面形では遺構として捉えることはできなかったが、須恵器などの古代の遺物が集中して出土する箇所が数カ所存在しており、古代には生活領域として使用されていたことが分かる。古代以前に属する遺構としては、隣接する第88

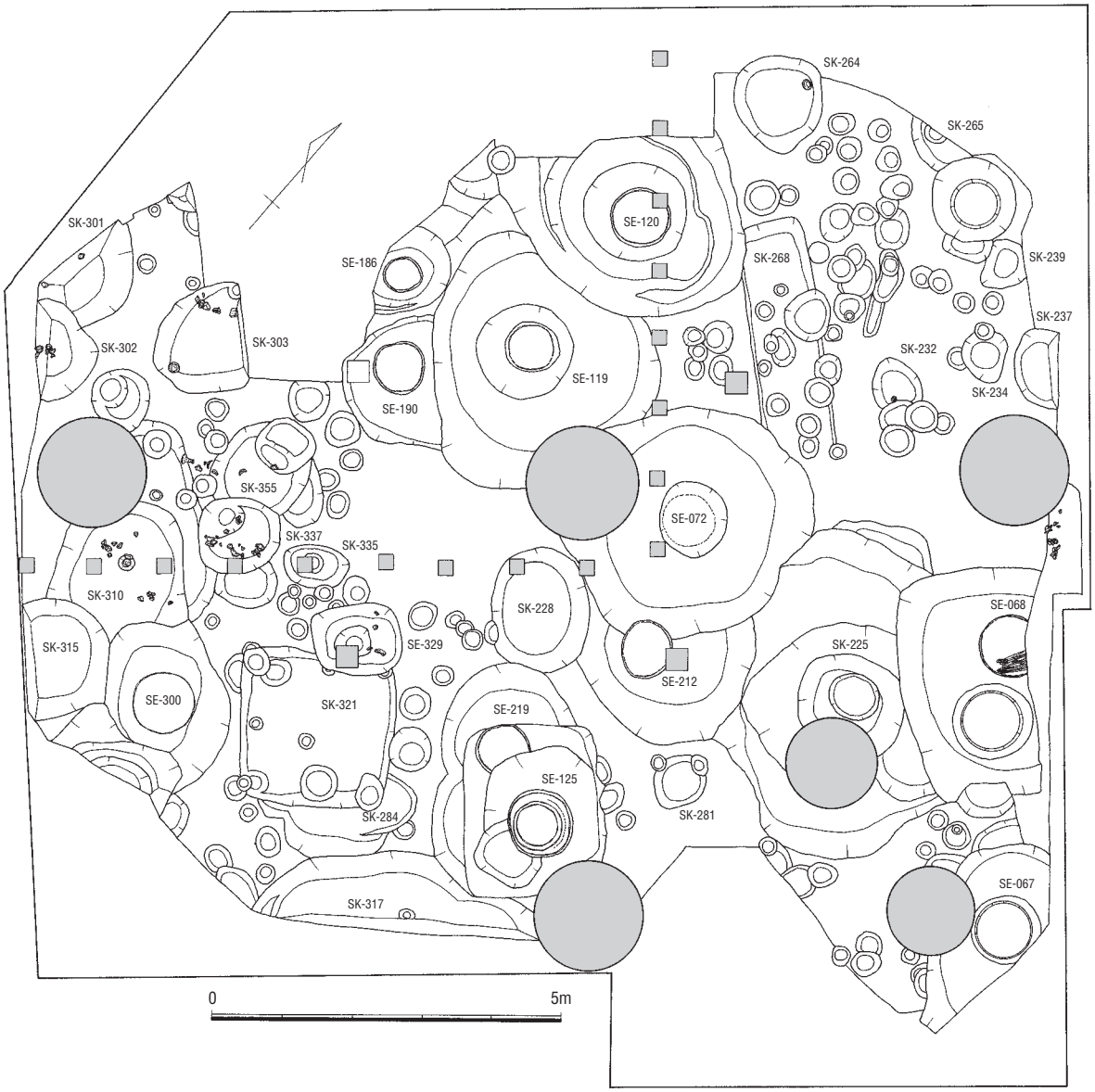


Fig.8　第4面遺構実測図（S＝1／100）

次調査区では弥生時代後期後半の甕棺墓の調査が行われており、同様の遺構の存在が予想されたが、本調査区では中世の井戸により攪乱されてしまったものと考えられ遺構としての検出はなく、甕の破片やガラス小玉7点が出土したのみであった。古墳時代の遺構の検出もなかったが、第4面上に堆積する暗褐色砂層中やSE-068付近からは古式土師器数個体が集中して出土していることなどから、本来は古代以前の遺構も存在していたものと考えられる。

各遺構面への掘り下げ作業時・井戸掘方掘り下げ時には、検出できなかった遺構面・消失してしまった遺構埋土からの遺物が大量に出土している。これらの遺物については、各遺構出土遺物・包含層出土遺物の項において報告を行いたい。

Ph.23　第4面調査状況（北東から）

Ph.24　第4面調査状況（南東から）

Ph.25　第4面調査状況（北東から）

Ph.26　第4面調査状況（西から）

Ph.27　第4面調査状況（北西から）

Ph.28　第4面調査状況（南西から）

2. 井戸

本調査地点においては計17基以上の井戸遺構を検出し、うち近世以降の瓦井戸を除く11基について調査を行った。また、調査区壁付近で検出された井戸遺構については安全対策上の理由から一部の掘り下げを行ったのみで完掘は行っていない。調査を行った井戸遺構についても各検出面からの完掘は掘方崩壊の恐れがあったため、各遺構面の調査において順次1m程度の掘り下げのみを行い、第4面の調査において井筒の検出並びに完掘を行った。

SE-068（Fig-9）

調査区東側で検出された井戸遺構で、第2面で掘方の一部を検出した。東側は調査区外に位置し西側半分を完掘した。井戸掘方は隅丸の方形で長軸4m前後を測るが、掘方南側には近代の瓦井戸が掘削されており、掘方の正確な形状は把握できない。掘方底面の北側寄り部分に直径90～110cmの桶が井筒として据えられる。桶は腐食のため遺存状態は不良で下半部のみ残存する。井筒底面の標高1m付近からは投棄された板材が出土した。遺物としては土師器・白磁・青磁などが出土しているが、井戸掘削時に下層の遺構を攪乱しており、古式土師器・須恵器なども出土している。

出土遺物をFig-10に示した。

1は同安窯系青磁平底皿である。内面見込みには片切彫りと櫛描による装飾が施される。2は龍泉窯系青磁香炉である。3･14は龍泉窯系青磁碗である。3は掘方上層から、14は掘方下層から出土した。4・7・8・10・11は土師器小皿である。8・11の底部はヘラ切りされる。5・15・16は土師器坏で底部はいずれも糸切り調整される。焼成良好、色調は褐色を呈する。6は白磁碁笥底皿である。9は青白磁菊弁皿である。

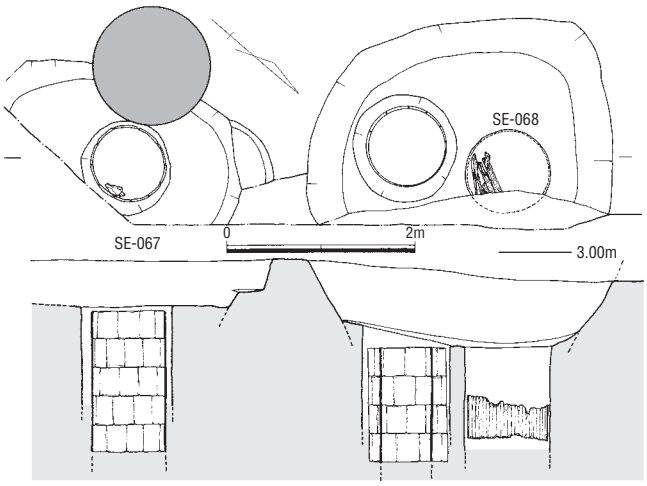


Fig.9　SE-067･068実測図（S＝1／80）

12は土師器小壺底部片である。底部は糸切りで色調は褐色を呈する。17は青白磁の小壺蓋である。18は明染付碗である。19は龍泉窯系青磁小碗である。外器面には連弁紋の一部が残る。20は青白磁皿の一部である。型押しによる草花文が施される。21は茶釉陶器の猿である。手捏ねで成形された手足などの部品を胴部に貼り付ける。下半部には別の器種に貼り付けられていた痕跡があり、把手の一部として用いられたものか。22

Ph.29　SE-067井筒検出状況（北西から）

Ph.30　SE-068検出状況（西から）

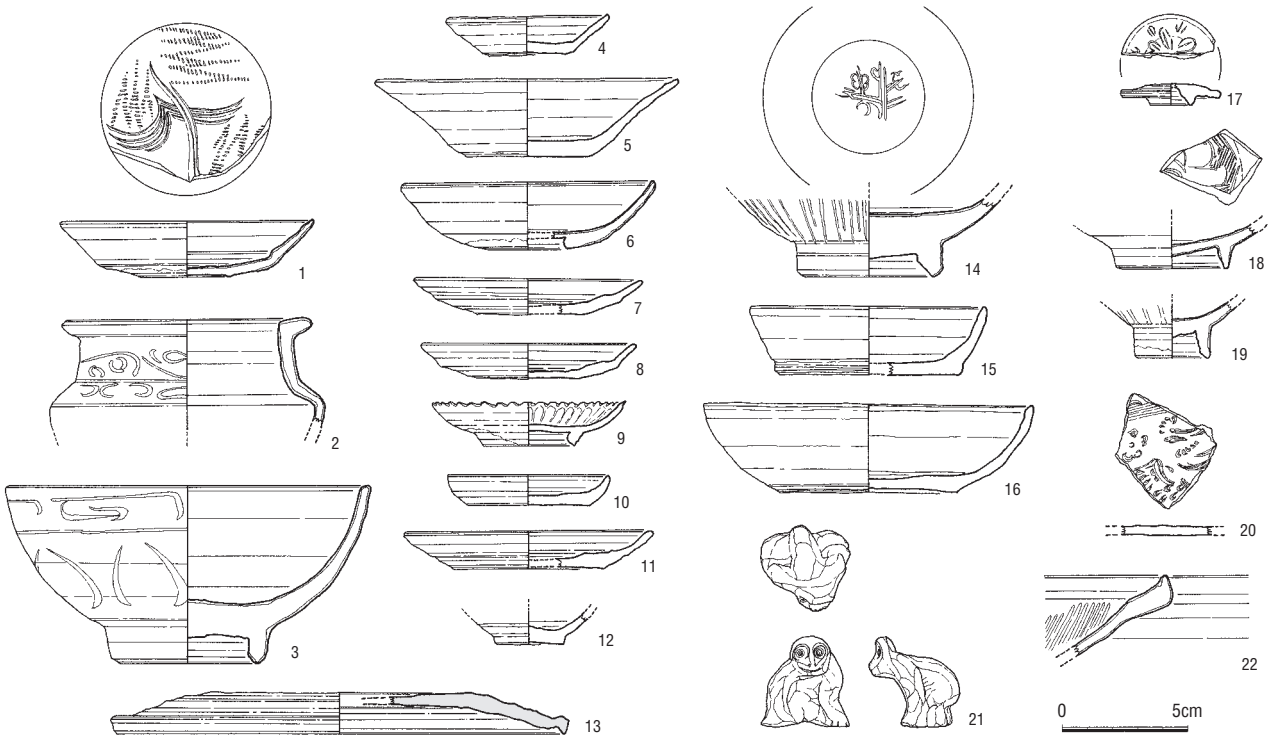


Fig.10　出土遺物実測図（S＝1／3）

は龍泉窯系青磁盤である。これらの出土遺物よりこの井戸遺構の時期としては15世紀代前半頃が考えられる。

SE-072（Fig-11）

調査区中央部付近で検出した井戸遺構で、第2面で検出した。検出時に井筒がほぼ中央で確認されていたが、周辺に土坑などの遺構が多数検出されていたため完掘は第4面で行った。検出時の掘方は直径5.4ｍ×4.8ｍの楕円形で、掘方底面は段を有し底面中央部に桶を転用した井筒を据える。桶の直径は84cm前後で、井筒の深さ90cmのうち高さ40cm前後で残存する。桶外周にはタガが一条巡り、井筒周辺は鉄分沈着により硬化する。井筒底面からは刀子・鉄製紡錘車（Ph.32）が出土した。

出土遺物をFig-12・13に示した。

23は鉄製紡錘車である。心棒は断面形が方形であるが、先端部は円形となる。24は刀子である。両端部を欠損し錆による腐食が著しい。25は鉄製釘で、断面形は方形となる。26は剃刀である。反りを持つ刀身で柄は残存しない。27～30・36・37は土師器小皿、31～35は土師器坏である。いずれも糸切り調整された底部となる。38は龍泉窯系青磁碗である。39は白磁碗である。内面に櫛描文を持ち、高台外底まで施釉する。40・42は青白磁合子身である。41は青白磁香炉口縁部である。

Ph.31　SE-072調査状況（北東から）

Ph.32　SE-072井筒内遺物出土状況（北東から）

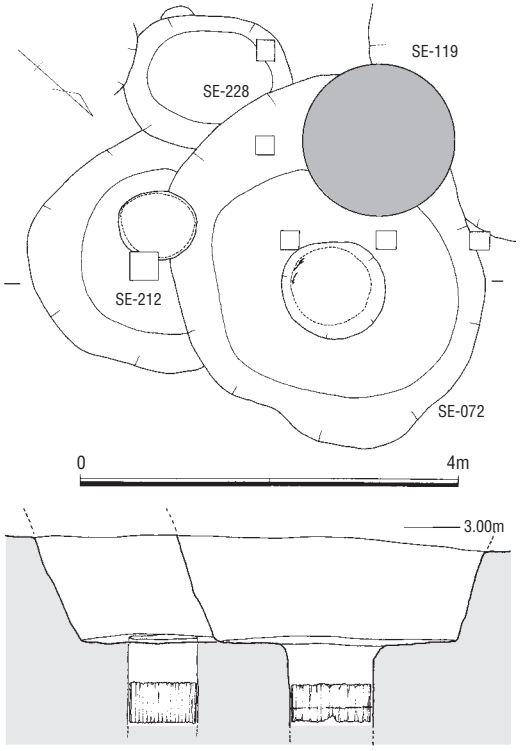


Fig.11　SE-072･212実測図（S＝1／80）

43は青白磁小壺胴部片である。44は中国陶器の無釉四耳壺である。45は白磁口禿小碗である。46・48は白磁碗である。47は天目茶碗である。49は越州窯系青磁碗である。50は土師質土器擂鉢である。

61は龍泉窯系青磁盤である。51～59までは掘方埋土より出土した他時期の遺物である。51は須恵器坏である。52～54は須恵器碗である。55は須恵器蓋の摘み部である。56・59は古式土師器小型丸底壺である。57は古式土師器壺口縁部である。58は古式土師器壺肩部である。57・58ともに焼成良好で、胎土は緻密である。これらの出土遺物より遺構の時期は14世紀代前半頃と考えられる。

SE-212（Fig-11）

調査区南東側で検出した井戸遺構で、第3面で掘方を検出した。SE-072・SK-228に切られる井戸で、掘方

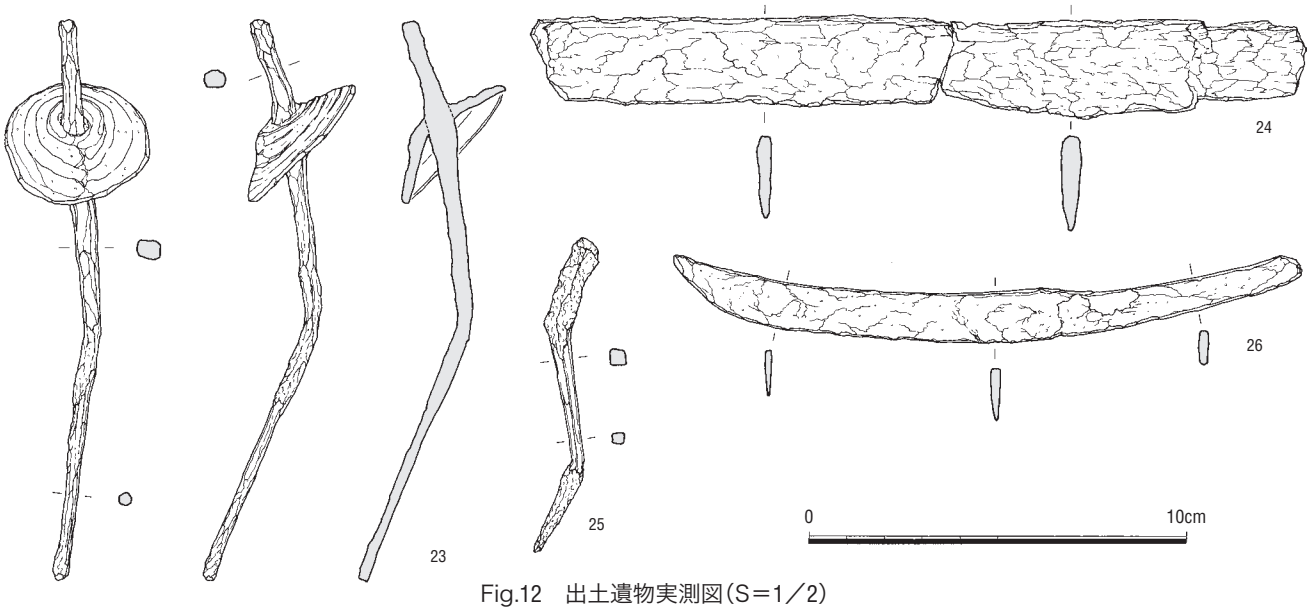


Fig.12　出土遺物実測図（S＝1／2）

Ph.33　SE-072周辺調査状況（北東から）

Ph.34　SE-072井筒検出状況（西から）

の平面形は長径2.5ｍ程度の楕円形を呈する。掘方底面は平面となり、南西側に寄った部分で井筒が検出される。井筒は桶の転用品で、Ｈ鋼打設により一部欠損し歪むが長径78cm、短径65cm、高さ45cm分が残存する。遺物は掘方埋土より土師器・須恵器・白磁碗などの貿易陶磁等が出土した。出土遺物をFig-13に示した。

60は白磁の羊である。上半身部のみが出土した。全体は手捏ねで成形され、線刻や管状工具により目や口などが表現される。壺蓋上面などの装飾部と考えられる。62は土師器甑の把手である。先端部を欠損し、本体への接合は貼り付けで行われる。古代の遺物であり、井戸掘削時に他の遺構からの混入した遺物と考えられる。

これらの出土遺物より遺構の時期は11世紀代後半頃の年代が考えられる。

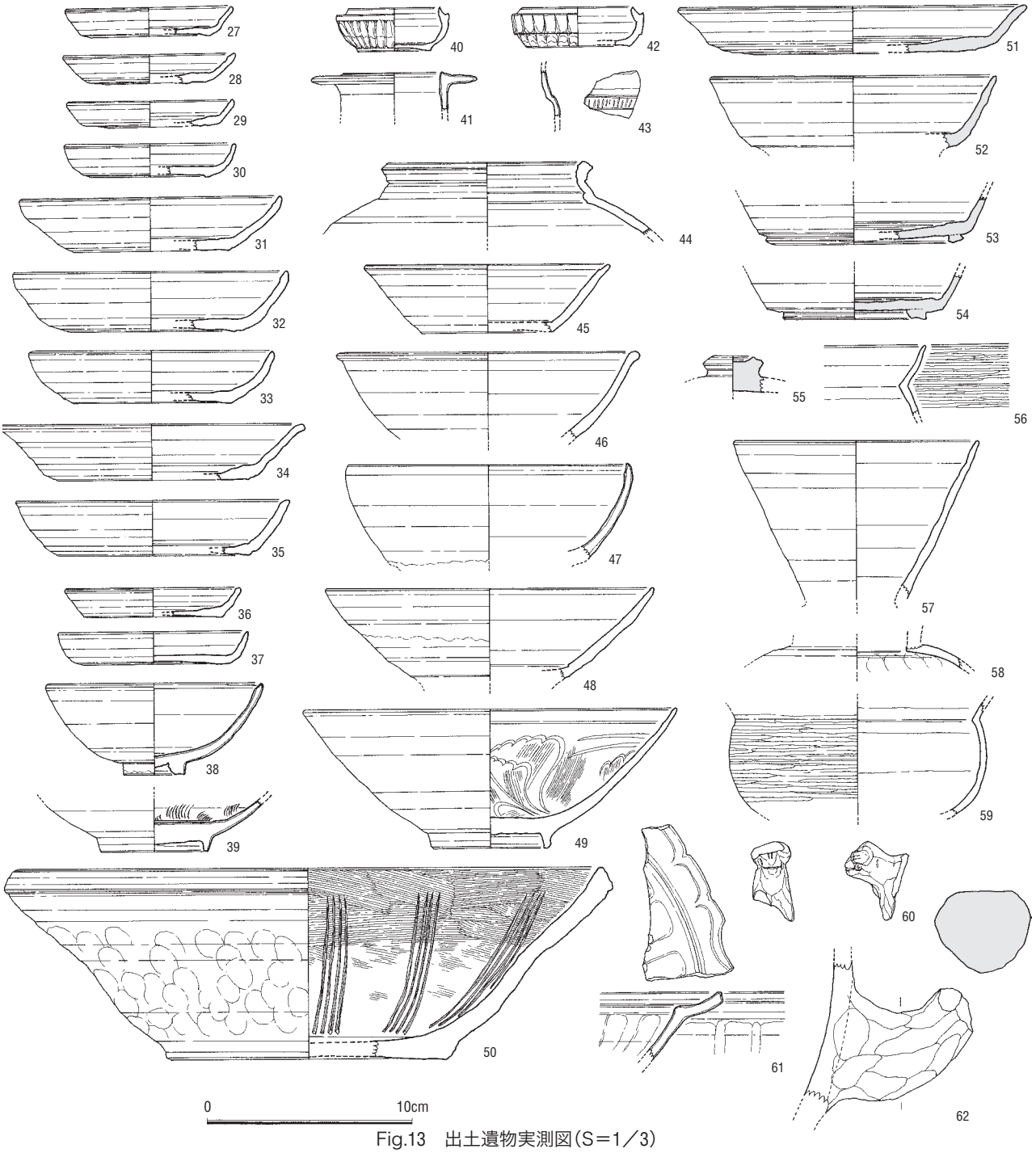


Fig.13　出土遺物実測図（S＝1／3）

SE-119（Fig-14）

調査区北西側で検出した井戸遺構で、第3面で掘方を検出した。SE-072・SE-120に切られる。第2面では井筒を土坑（SK-103）として調査していたが、掘り下げの結果井筒であることが判明した。掘方の一部は安全上の問題から未調査であるが、平面形は円形で直径4ｍ前後であることを確認した。掘方底面には段を有し、その中央部に径1.4ｍの掘り込みを行い、その中に桶を井筒として据える。桶は直径64cm前後を測り、掘方底面から85cmの深さまで板材が残存する。井筒内からは井戸廃絶時に投棄されたと考えられる土師器皿・坏がコンテナ2箱出土した。

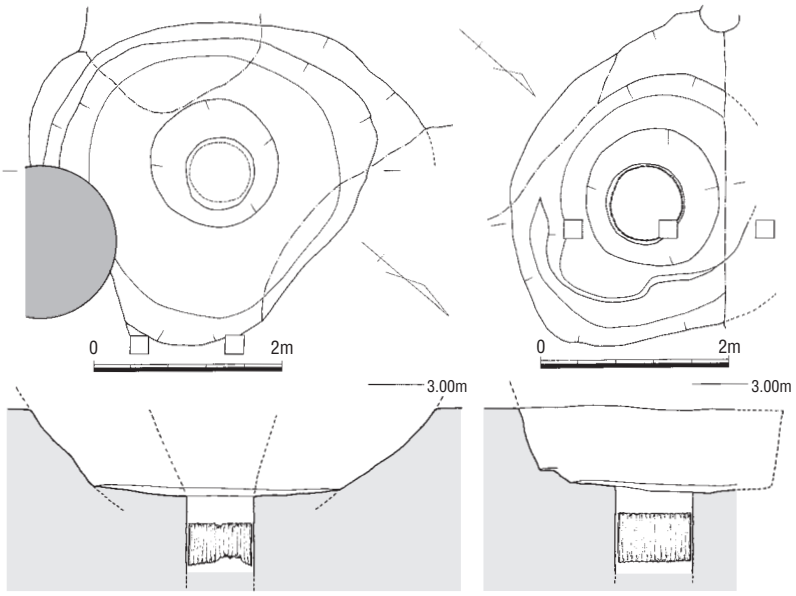


Fig.14　SE-119･120実測図（S＝1／80）

出土遺物をFig-15に示した。

63は白磁紅皿である。64は青白磁合子身である。65は青白磁小壺胴部片である。66は青白磁合子蓋である。67は龍泉窯系青磁碗である。内面見込みには片切彫りによる装飾が施される。68は白磁碗である。体部下半まで施釉し、以下を露胎とする。69は吉州窯玳皮天目茶碗である。70は龍泉窯系青磁平底皿である。71は青白磁香炉蓋である。鶏の頭部を模

Ph.35　SE-119周辺調査状況（北西から）

Ph.36　SE-119井筒検出状況（北西から）

Ph.37　SE-120調査状況（南西から）

Ph.38　SE-120井筒検出状況（北から）

しているが、前面は欠損する。

72は糸切りされる土師器坏である。73は土師器椀である。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。これらの出土遺物より遺構の時期は13世紀代後半頃と考えられる。

SE-120（Fig-14）

調査区北西側で検出した井戸遺構で、第3面で掘方を検出した。検出部分での直径は3.0ｍ前後で、掘方底面に平坦面を持つ。井筒には桶を使用しており、桶の直径は75cm前後を測る。井筒内には廃絶時に土師器小皿・坏が多量に廃棄されており、コンテナケース5箱分が出土した。

出土遺物をFig-15に示した。

74・80は井戸掘方より出土した白磁口禿皿である。75は白磁平底皿である。76は糸切りされた土師器小皿である。77は瓦器小皿である。78･79は土師器坏である。いずれの底部も糸切り調整される。

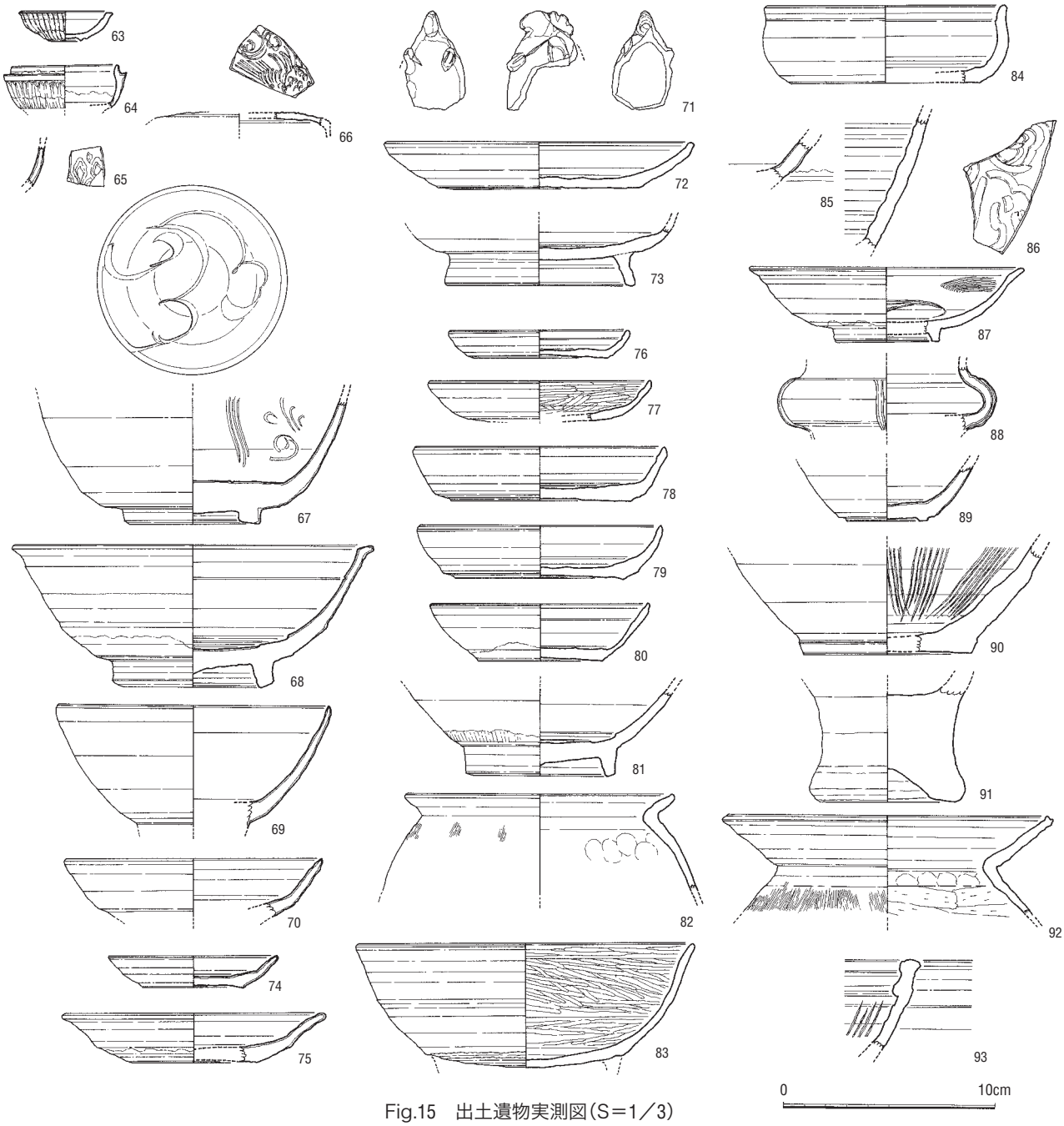


Fig.15　出土遺物実測図（S＝1／3）

81は白磁碗である。82は土師器壺である。掘方埋土より出土した。83は黒色土器埦である。高台部は欠損する。内面にはヘラ磨きが密に施され、炭を吸着させ内黒とする。

84は土師器埦である。85は天目茶碗である。86は青白磁梅瓶胴部片である。87は白磁浅碗である。88は龍泉窯系青磁香炉の胴部片である袴腰型の香炉で、釉調はオリーブ色を呈する。89は玳皮天目茶碗である。90は陶器擂鉢である。91は弥生土器甕底部片である。遺存状態は不良で、色調は暗褐色を呈する。92は古式土師器壺口縁部片である。外器面には刷毛目調整、内器面にはヘラ削り・指頭圧痕が観察できる。

93は中国陶器擂鉢である。出土遺物の時期は多岐にわたるが、井筒内出土遺物より遺構の時期は13世紀代前半頃と考えられる。

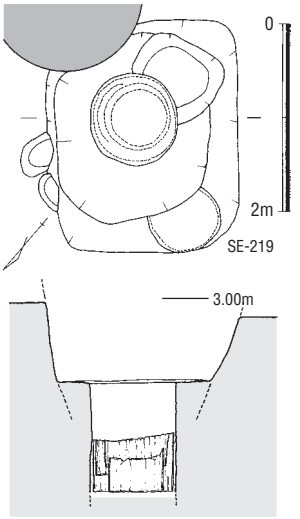


Fig.16　SE-125・219実測図(S＝1／80)

SE-125（Fig-16）

調査区南側で検出した井戸遺構で、第3面で掘方を検出した。第2面では円形の埋土を確認していたが、井筒の痕跡などは検出されておらず、廃絶後に黄褐色粘質土による丁寧な整地が行われていたと考えられる。第3面で確認した掘方は長方形で、底面南寄りの部分に井筒を据える。掘方底面は平坦面を持たず、井筒底面まで一気に掘り下げて井戸を掘削している。井筒には4個体の桶を使用するが、破損した桶を転用しており、欠損部分を補強する目的が想定される。外周部分の桶は直径90cm

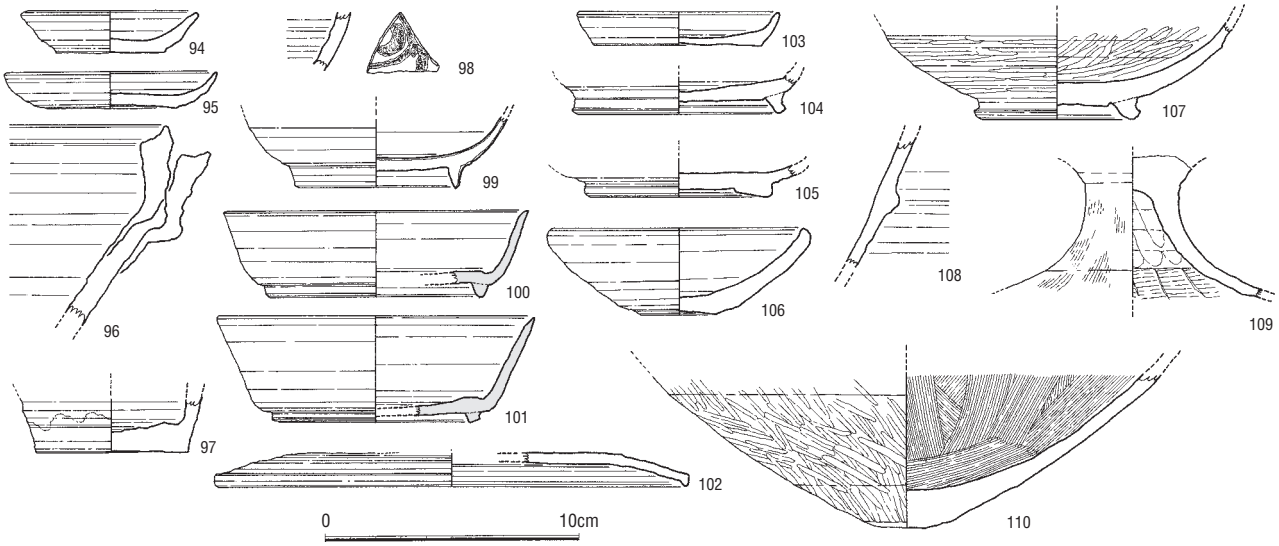


Fig.17　出土遺物実測図(S＝1／3)

Ph.39　SE-125検出状況(西から)

Ph.40　SE-125井筒検出状況(西から)

の大型のもので、内側の桶は直径60cmのものが使用される。

出土遺物をFig-17に示した。

94・95は糸切りの土師器小皿である。焼成は良好で色調は褐色を呈する。96は備前片口鉢である。97は瀬戸焼壺底部である。98は白磁鉄絵壺である。99は白磁碗高台部である。100・101は須恵器碗で他遺構からの混入品である。これらの出土遺物より遺構の時期は13世紀代中頃の年代が考えられる。

SE-219（Fig-16）

調査区南側で検出した井戸遺構で、SE-125に切られる。掘方の大半はSE-125により攪乱されるが、残存部分から推定した掘方は平面形が長径2.0ｍ前後の楕円形と考えられる。井筒は桶を使用したものと考えられるが、遺存は不良で板材の一部が残る。直径70cm程度で、残存高は15cm程度を測る。

出土遺物をFig-17に示した。

102は土師器蓋である。103は糸切りの土師器小皿である。104は内黒の黒色土器埦である。105は緑釉陶器埦である。106は中国陶器茶褐釉平底皿である。107は土師器埦で内外器面にヘラ磨きが施される。108は土師器壺胴部片である。109は古式土師器器台である。110は古式土師器甕底部片である。出土遺物と切り合い関係より遺構の時期は12世紀代後半頃が考えられる。

SE-186（Fig-18）

調査区北西側で検出した井戸遺構で、第4面で掘方を検出した。SE-119・SE-190に切られる。検出時の掘方平面形は直径1.4ｍ前後の円形を呈する。井筒は腐食のため残存しないが、直径50cm前後の桶を使用したものと考えられる。埋土より土師器・須恵器・白磁、青磁などの貿易陶磁器などが出土した。

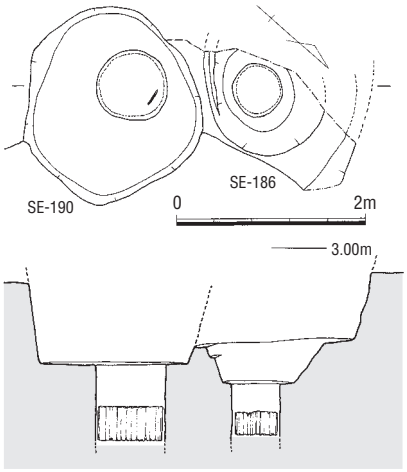


Fig.18　SE-186・190実測図（S＝1／80）

出土遺物をFig-19に示した。

111・112・132は白磁平底皿である。113・114は白磁碗である。115・116は須恵器蓋である。117は須恵器坏である。118・119は土師器小皿である。いずれも糸切り調整される。120・121は糸切りの土師器坏である。133は龍泉窯系青磁平底皿で見込みに片切彫りで草花文が施される。134は白磁小碗である。135～137は白磁玉縁碗である。138・139は白磁碗である。

これらの出土遺物より遺構の年代は13世紀代前半頃と考えられる。

Ph.41　SE-186井筒検出状況（北西から）

Ph.42　SE-190井筒検出状況（北から）

SE-190（Fig-18）

調査区北西側で検出した井戸遺構で、SE-119に切られ、SE-186を切る。平面形は円形で長軸1.8ｍ前後を測る。底面には平坦面を有し西側に井筒を据える。井筒には直径75cm程度の桶を使用する。

出土遺物をFig-19に示した。

122～125は土師器小皿である。いずれも糸切り調整された底部を持つ。126は土師器坏を転用した土器錘である。127は白磁平底皿である。128は白磁浅碗である。129・131・140は白磁碗である。

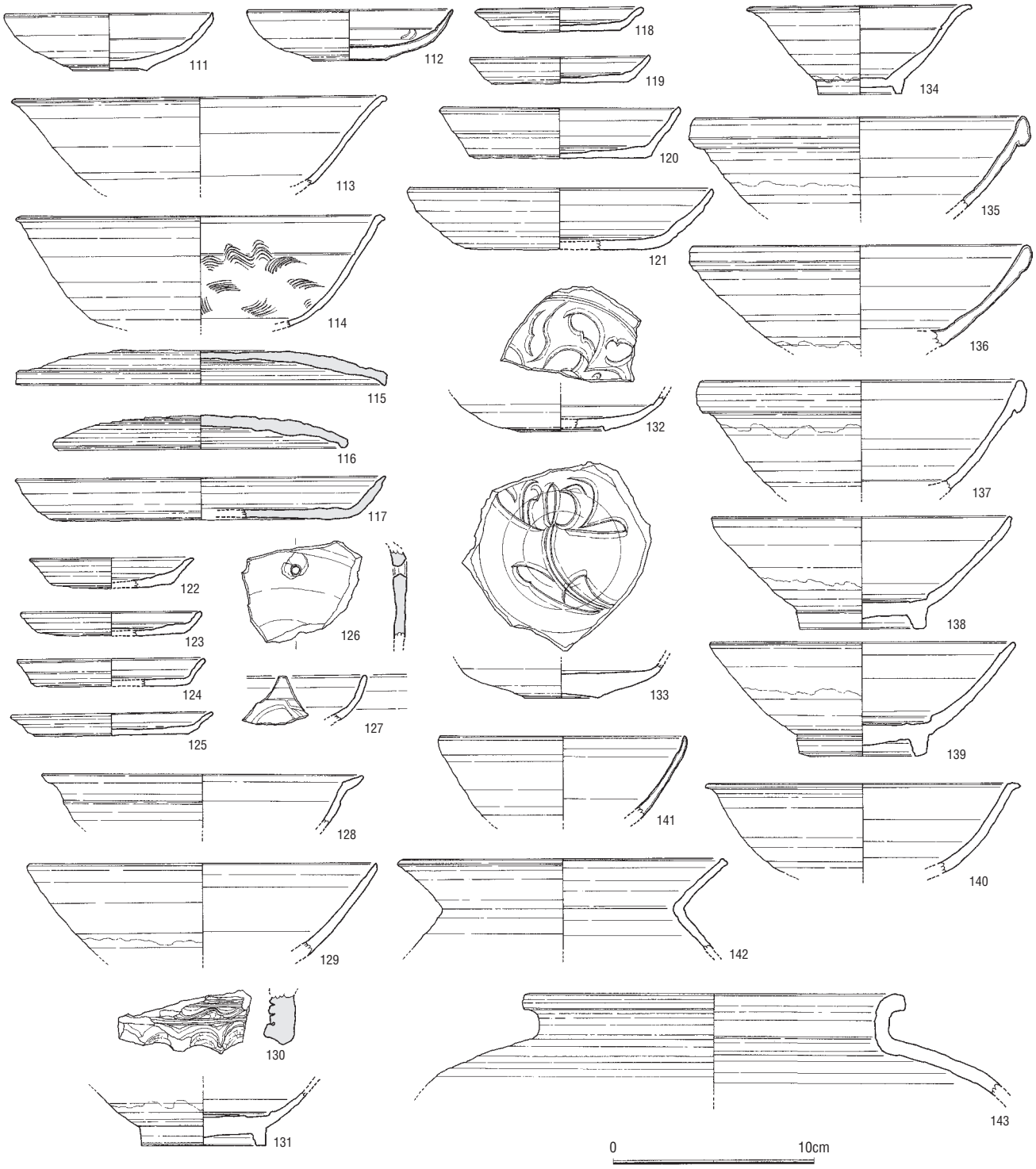


Fig.19　出土遺物実測図（S＝1／3）

130は軒平瓦である。142は掘方埋土より出土した古式土師器壺である。143は中国陶器褐釉壺である。これらの出土遺物より遺構の時期は13世紀代中頃と考えられる。

SE-225（Fig-20）

調査区南東側で検出した井戸遺構で、第3面で掘方の一部を検出し、第4面で井戸全体を検出した。SE-072に切られ、SE-212を切るように掘削される。残存部での長軸は4.4ｍ前後を測り、底面中央部に井筒を据える。井筒は腐食のため残存しない。出土遺物をFig-21に示した。

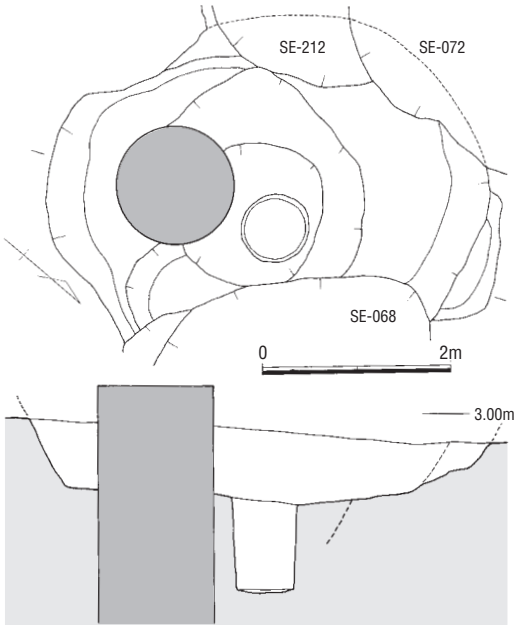


Fig.20　SE-225実測図（S＝1／80）

144は土師器小皿である。145・146は土師器坏である。いずれもヘラ切りされる。147は白磁平底皿である。148は白磁小碗である。149は須恵器蓋である。150は須恵器碗である。151は青磁壺飾り部である。152は弥生土器甕突帯部である。153・154は古式土師器小型丸底壺である。155は黒色土器埦である。156～158は土師器甕である。159は土師器壺である。160～162は土師器甑把手である。いずれも本体器面に貼り付けて接合するものである。

出土遺物の多くは他の遺構からの混入であるが、遺構の時期は12世紀代前半頃と考えられる。

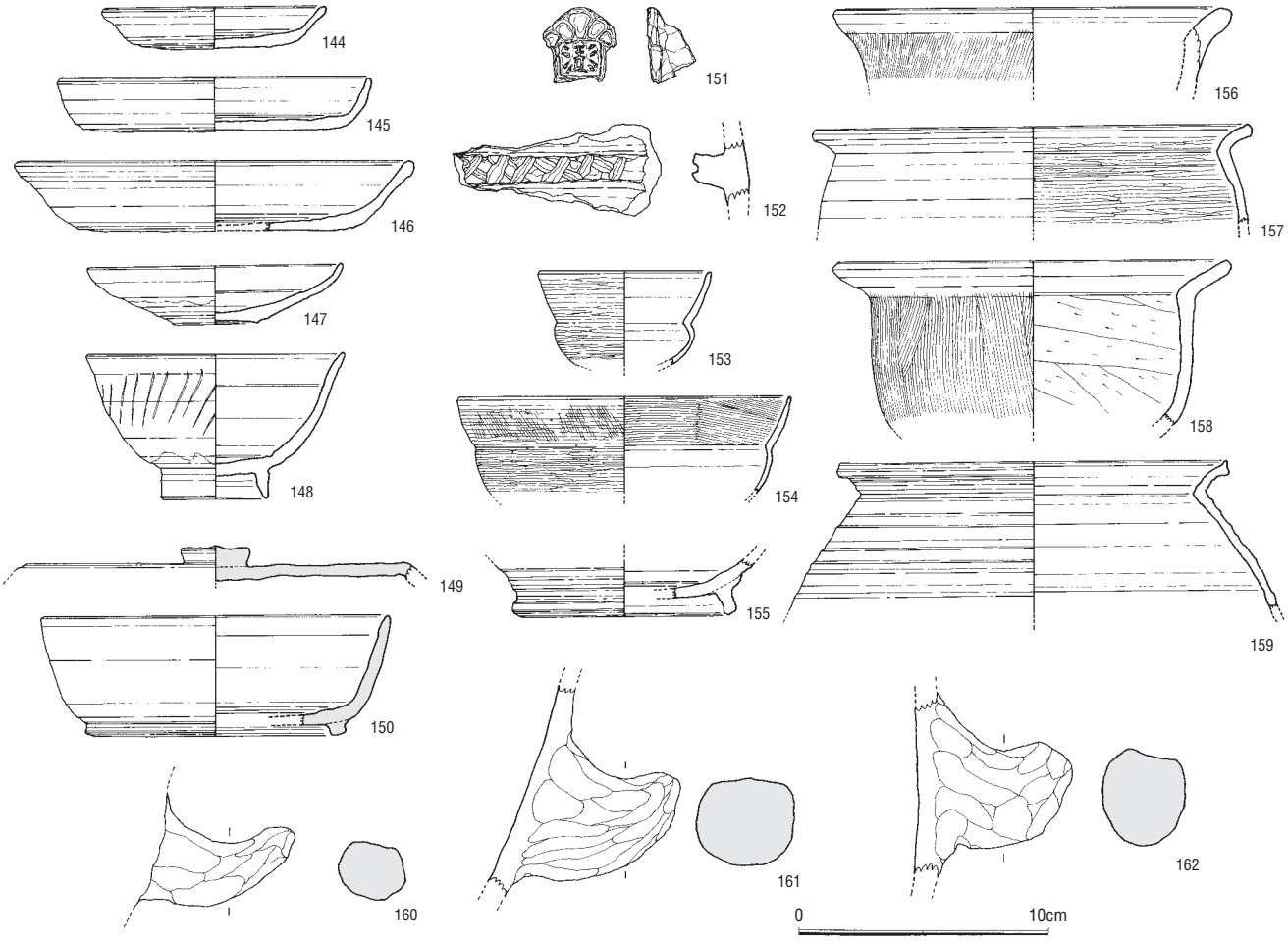


Fig.21　出土遺物実測図（S＝1／3）

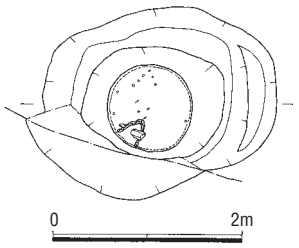
SE-300（Fig-22）

調査区東側の拡張部南側で検出した井戸遺構で、第3面で掘方を検出した。掘方の平面形は隅丸の長方形で、長軸2.4ｍ前後を測る。底面中央部に井筒として桶を据える。桶は直径90cm、残存高70cm前後で、タガを3段有する。井筒底面には廃絶時に投げ入れられた銅銭19枚とＵ字形の農具先端部と考えられる鉄製品が出土した。遺物は土師器・貿易陶磁器・陶器・銅銭21枚などが出土した。

出土遺物をFig-23に示した。

163は糸切り調整された土師器小皿である。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。164は土師器坏である。165白磁平底皿である。166は土鈴である。

これらの出土遺物より遺構の時期は13世紀代と考えられる。



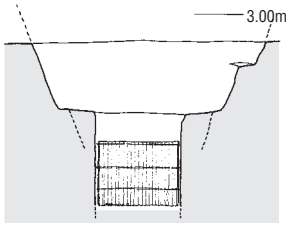


Fig.22　SE-300実測図（S＝1／80）

3. 土坑

各遺構面の説明において挙げた遺構のうち、遺構面の時期を考える上で重要となる土坑などの遺構について以下に説明を行う。

SK-080（Fig-24）

第2面で検出した土坑で、平面形は楕円形を呈する。長軸80cm、短軸60cmを測る。検出面から土坑底面までの深さは18cm前後を測り、埋土は炭化物・焼土を多く含む暗灰褐色土である。土坑内には土師器片が廃棄されており、廃棄土坑としての用途が考えられる。

出土遺物をFig-25に示した。

167・168は土師器小皿である。いずれも底部は糸切り調整される。169～172は土師器坏である。これらの坏も底部は糸切り調整され、焼成は良好で色調は褐色を呈する。この遺構の年代は出土遺物より、14世紀代中頃の時期が考えられる。

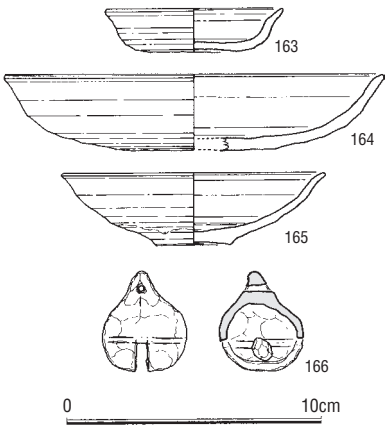


Fig.23　出土遺物実測図（S＝1／3）

SK-092（Fig-26）

第2面北東壁際で検出した土坑である。土坑東半分は壁面養生のため掘り下げを行っていない。検出部での平面形は長方形で、長軸1.2ｍを測る。土層観察からは第1面下の標高4.50ｍ地点からの掘り込みが確認できる。埋土は暗褐色砂質土と炭化物層が交互に堆積しており、底面より20cm程度の地点に土師器小皿・坏

Ph.43　SE-300調査状況（北西から）

Ph.44　SE-300井筒内遺物出土状況（西から）

が集中して検出される。土坑南側部分にも同様の土師器廃棄があり、堆積状況より一連の廃棄行為の所産として調査した。

出土遺物をFig-28に示した。

173～176は土師器小皿である。177～181は土師器坏である。これらの土師器小皿・坏は底部がいずれも糸切り調整され法量もほぼ一定の数値が計測された。これらの出土遺物よりこの廃棄土坑の時期は14世紀代後半頃の年代が考えられる。

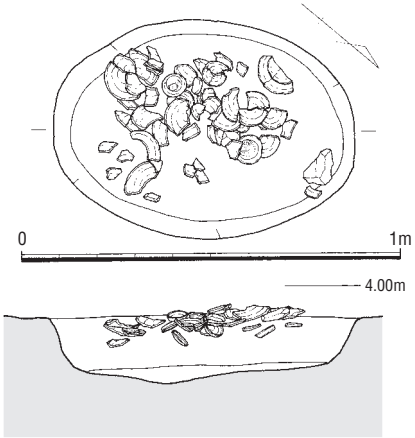


Fig.24　SK-080実測図（S＝1／20）

SK-093（Fig-27）

第2面北側で検出した土坑で、西側を瓦井戸（SE-013）に切られる。検出できた部分での平面形は長方形を呈し、長軸は2.0m前後を測る。検出面から底面までの深さは40cmを測る。埋土は暗褐色粘質土で、埋土からは土師器・龍泉窯系青磁碗・陶器などの遺物が出土した。

出土遺物をFig-28に示した。

182・183は土師器小皿である。184は糸切りの底部を持つ土師器坏である。185は白磁平底皿である。186は白磁口禿皿である。187は白磁高台付皿である。188は白磁碗である。189は同安窯系青磁碗である。外器面には櫛描文、内器面には櫛描紋と片切彫りによる装飾を施す。190は龍泉窯系青磁小盤である。191は龍泉窯系青磁碗である。外器面に鎬蓮弁文を施す。192は中国陶器褐釉鉢である。

これらの出土遺物より遺構の時期は14世紀代初頭と考えられる。

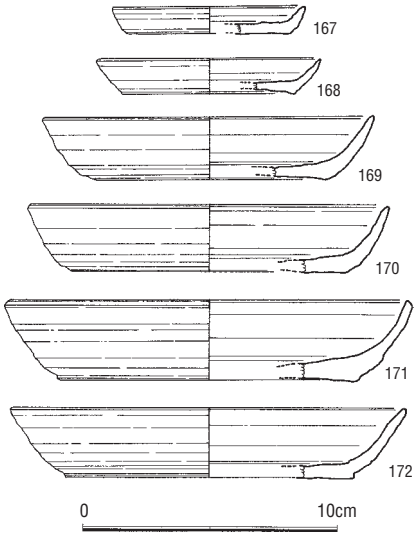


Fig.25　出土遺物実測図（S＝1／3）

SX-101（Fig-29）

第2面北側で検出した大型土坑である。平面形は不定形で、埋土は暗褐色粘質土で、礫・焼土・炭化物を多量に含む。底面付近には土師器坏が列状に廃棄されており、溝遺構の一部である可能性も考えられる。出土遺物としては土師器小皿・坏や白

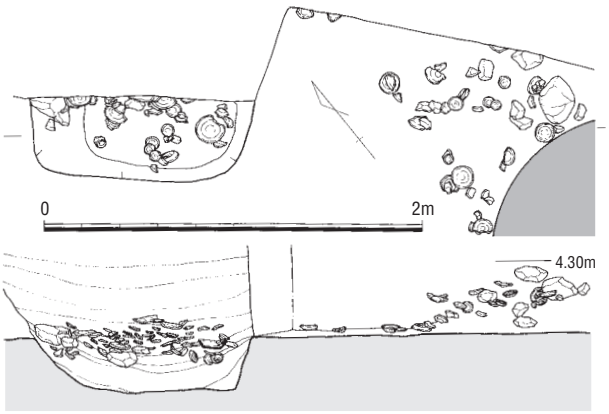


Fig.26　SK-092実測図（S＝1／40）

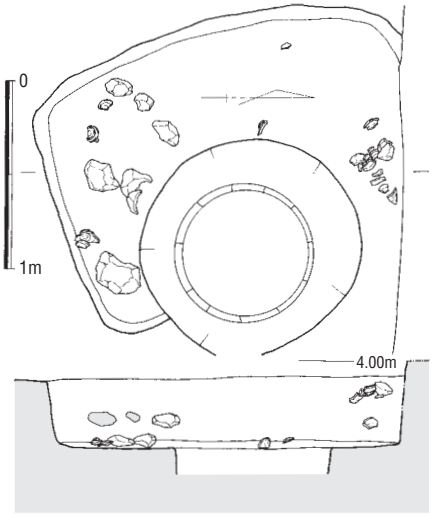


Fig.27　SK-093実測図（S＝1／40）

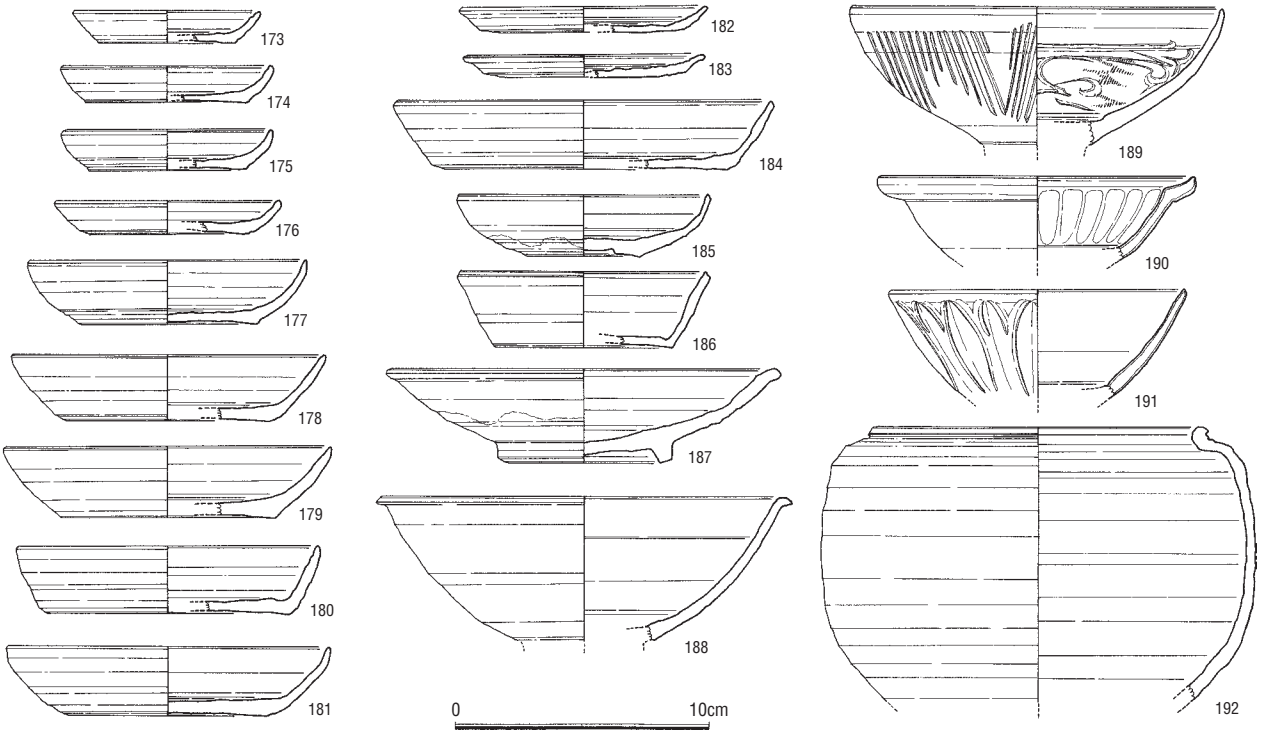


Fig.28　出土遺物実測図（S＝1／3）

磁碗、陶器などがある。

出土遺物をFig-30に示した。

193は瀬戸卸皿である。194は備前甕口縁部である。195は中国陶器甕である。出土した土師器皿・坏30個体の平均法量は口径8.0cm、12.4cm、底径は6.25cm、8.20cm、器高は1.25cm、2.75cmを測る。いずれも焼成は良好である。出土遺物より遺構の時期は14世紀代前半頃が考えられる。

SX-107（Fig-29）

第2面北側で検出した遺構で、溝状の落ち込みに多量の土師器小皿・坏などが廃棄されていた。SX-101とは直交する位置にあり、両遺構は

Fig.29　SX-101・107実測図（S＝1／40）

一連の溝状遺構である可能性も考えられる。埋土は暗褐色砂質土と暗褐色砂が交互に堆積するもので、底面直上に土師器小皿・坏が廃棄される。出土状況からは廃棄方向の推定は困難であるが、ほぼ同時期と考えられるSE-072が南側に位置することから西側の投棄が考えられる。SX-101・SX-107は建物東側角を巡る一連の溝状遺構か。遺物は土師器小皿・坏や須恵質土器、鉄製品、銅銭などがコンテナケース7箱分出土した。

出土遺物をFig-30・31に示した。

196は瓦質土器片口鉢である。197～200は鉄製刀子である。200は木製の柄で内部に刀身が残る。これらの刀子は実用品ではなく、祭祀用の形代と考えられる。饗宴時に使用され廃棄されたものか。201は鉄鏃である。これも儀式用の形代であろう。先端部は欠損するがほぼ完形で出土した。全長7.2cm、器厚0.3cm程度を測る。202・204は鉄製の部材である。

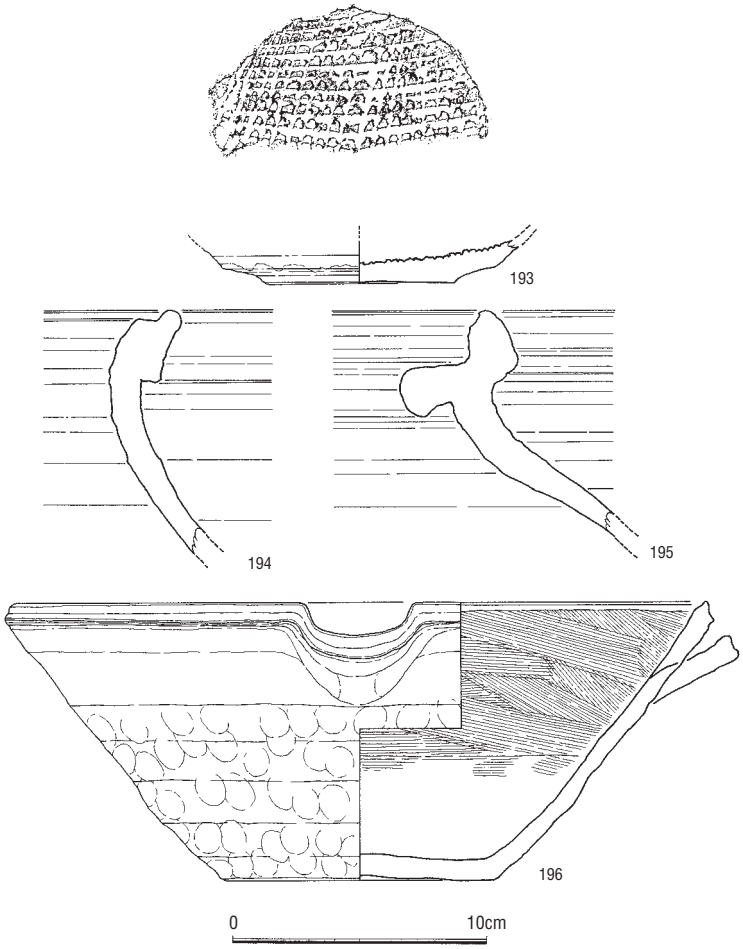


Fig.30　出土遺物実測図（S＝1／3）

Ph.45　SX-107調査状況（東から）

Ph.46　SX-107遺物出土状況（東から）

Ph.47　SX-101遺物出土状況（南西から）

Ph.48　SX-101遺物出土状況（南から）

202は断面形が三角形を呈し、両端部は欠損する。204は縁辺部が欠損するため原形は判然としない。203～205は鉄釘である。断面形は方形を採り、頭部は折れ曲がる。

出土した土師器小皿・坏70個体（小皿54点・坏16点）の平均法量は、小皿が口径8.10cm、底径5.95cm、器高1.10cmを測る。坏は口径12.20cm、底径8.65cm、器高2.85cmを測る。出土状況としては重ねた状態で廃棄されるものが多く見られる。小皿・坏はいずれも底部が糸切り調整されており、一部は板目圧痕を持つ。焼成は良好で、色調は褐色～橙色を呈する。

なお、刀子は出土時には錆に厚く覆われていたが、福岡市埋蔵文化財センターの協力により錆を除去し刀身の確認を行った。197・198の柄部には木質が残存しており、強化のための保存処理を行っている。

これらの出土遺物より遺構の時期は14世紀代前半頃が考えられ、SX-107との時期差は見られないことからも同時に存在した一連の廃棄遺構と考えられる。

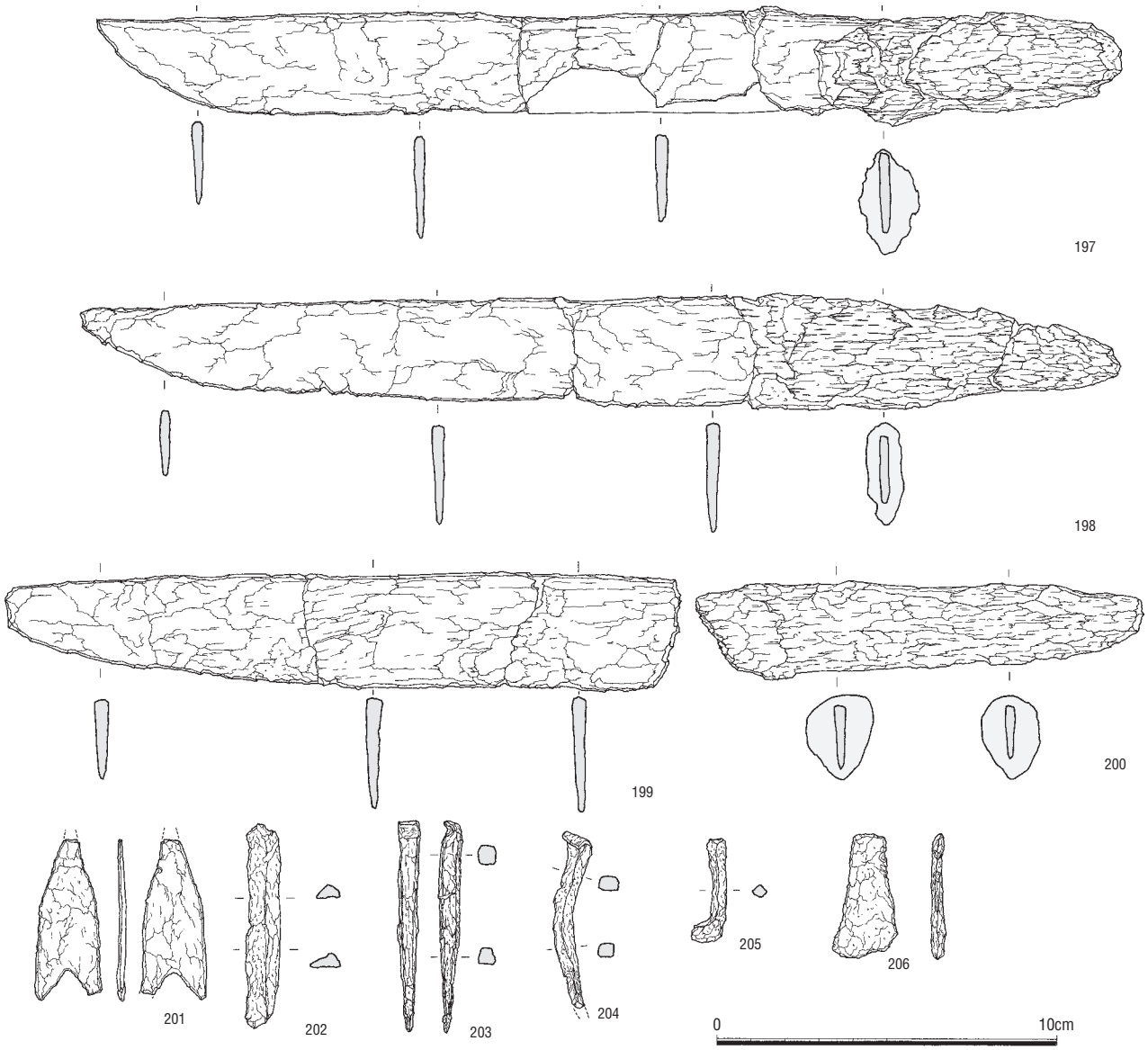


Fig.31　出土遺物実測図（S＝1／2）

SK-114（Fig-32）

第2面南東部で検出した土坑である。西側をSE-067に切られ、南側は未調査区へと延びる。検出部分での平面形は長方形を呈し、埋土は焼土・炭化物を多く含む暗灰褐色土である。検出面から底面までの深さは30cm前後を測る。2面遺構検出時には確認できなかったが、10cm程度掘り下げた整地層面で検出した。遺物は土師器小皿・坏や白磁碗・青磁碗などが出土し、土坑埋土上面には焼けた骨片・礫が散乱する。検出状況より土壙墓の可能性も考えられた。

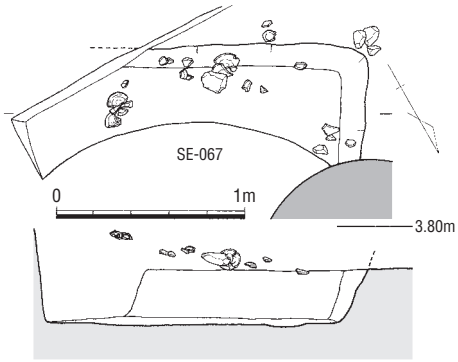


Fig.32　SK-114実測図（S＝1／40）

出土遺物をFig-33に示した。

207は龍泉窯系青磁脚付香炉である。上半部は欠損し、底部付近のみが出土した。底部と脚先端部は露胎とし、これ以外は施釉する。釉調は明オリーブ色を呈する。これらの出土遺物より遺構の時期は13世紀代後半頃の年代と考えられる。

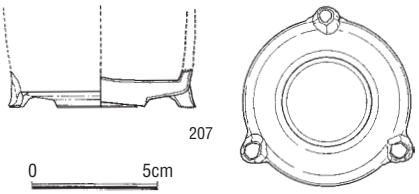


Fig.33　出土遺物実測図（S＝1／3）

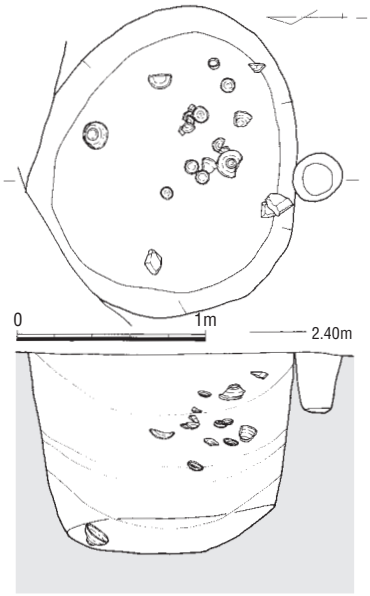


Fig.34　SK-126実測図（S＝1／40）

SK-126（Fig-34）

第3面北側で検出した廃棄土坑で、平面形は楕円形を呈する。検出面から底面までの深さは1.10ｍを測り、埋土は上面から暗褐色土、暗黄褐色粘質土、暗灰褐色粘質土、暗褐色粘質土、黒褐色粘質土と堆積する。埋土上層部と底面直上から土師器などの遺物が出土する。出土遺物をFig-35に示した。

208～210は土師器の小皿である。209はヘラ切りの底部を持つ。211は土師器坏である。底部は糸切り調整され板目圧痕が施される。212～214は白磁平底皿である。215～217は白磁碗である。215 は内面に櫛描文が施される。218は白磁壺である。219は青白磁碗である。畳付きまで施釉し、内面見込みには片切彫りと櫛描文による装飾が施される。

出土遺物より遺構の時期は12世紀代前半頃が考えられる。

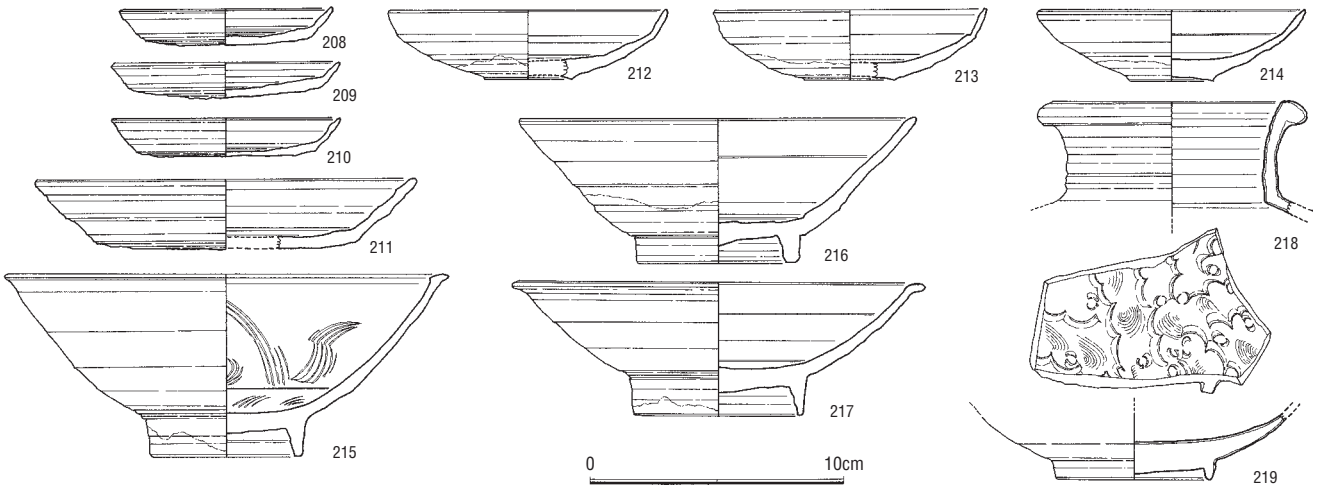


Fig.35　出土遺物実測図（S＝1／3）

SK-148（Fig-36）

第3面北東側で検出された遺構で、掘り下げ時には井戸遺構と考えていたが、土坑底面には黒褐色粘質土が堆積しており湧水点に達していないことから、廃棄土坑とした。土坑壁である暗褐色砂層には鉄分が約2.5cm程度の厚さで沈着し硬化面を形成する。遺物は土坑埋土より土師器、白磁、高麗青磁などが出土した。

出土遺物をFig-37に示した。

220はヘラ切り底部の土師器小皿である。221は土師器埦である。222 は須恵器碗である。223は瓦器椀である。外器面には横位のヘラ磨き、内器面には斜格子状のヘラ磨きが施される。224・225は白磁碗である。226 高麗青磁碗である。227は白磁小碗である。228は高麗無釉陶器壺である。これらの出土遺物より遺構の年代は11世紀代後半頃の時期が考えられる。

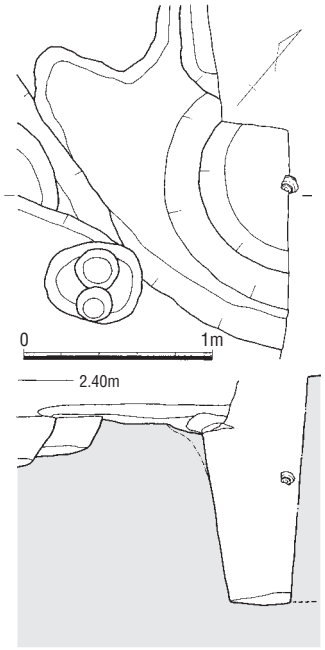


Fig.36　SK-237実測図（S＝1／40）

SK-180（Fig-38）

第3面北側で検出した土坑で、西側をSE-120に切られる。平面形は楕円形で長軸1.3ｍ、短軸1.0ｍを測る。検出面から土坑底面までの深さは35cmを測り、底面東側に土師器小皿・坏や白磁などの遺物が集中して廃棄される。出土遺物をFig-39に示した。

229～232は土師器小皿である。底部はいずれもヘラ切り調整される。焼成は良好で色調は褐色を呈する。233・234は白磁平底皿である。釉調はいずれ緑灰色を呈する。235は須恵器碗である。出土した土師器小皿・坏は

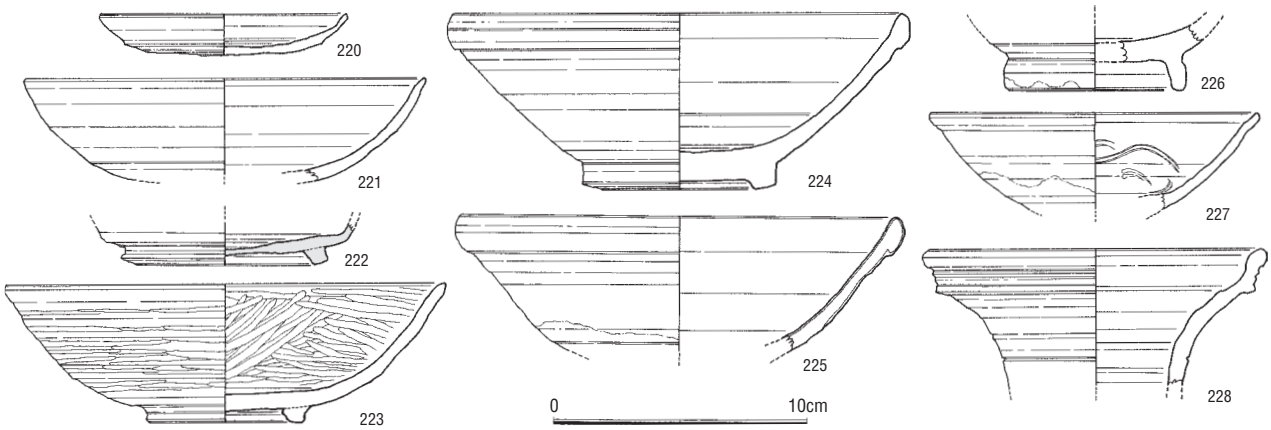


Fig.37　出土遺物実測図（S＝1／3）

Ph.49　SK-180遺物出土状況（南西から）

Ph.50　SK-180遺物出土状況（北東から）

糸切りとヘラ切りが混在し、ほぼ同時に廃棄されたことが推測される。出土遺物より遺構の時期は12世紀代初頭頃が考えられる。

SK-182（Fig-38）

第3面で検出した土坑で、北東側の大部分をSE-120に切られる。北側にはSK-180が存在し同一遺構であった可能性が考えられる。土坑底面直上から土師器小皿・坏や白磁などが出土した。出土遺物をFig-39に示した。

236～240は土師器小皿である。底部はヘラ切りと糸切りが混在する。法量から2群に分けられるが底部調整差とは関連しない（口径9cm以下と口径10cm前後の2 群）。243は糸切り調整された土師器坏である。

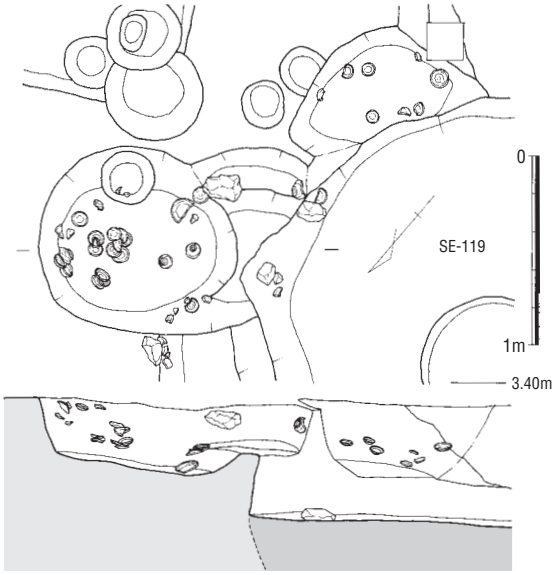


Fig.38　SK-180･182実測図（S＝1／40）

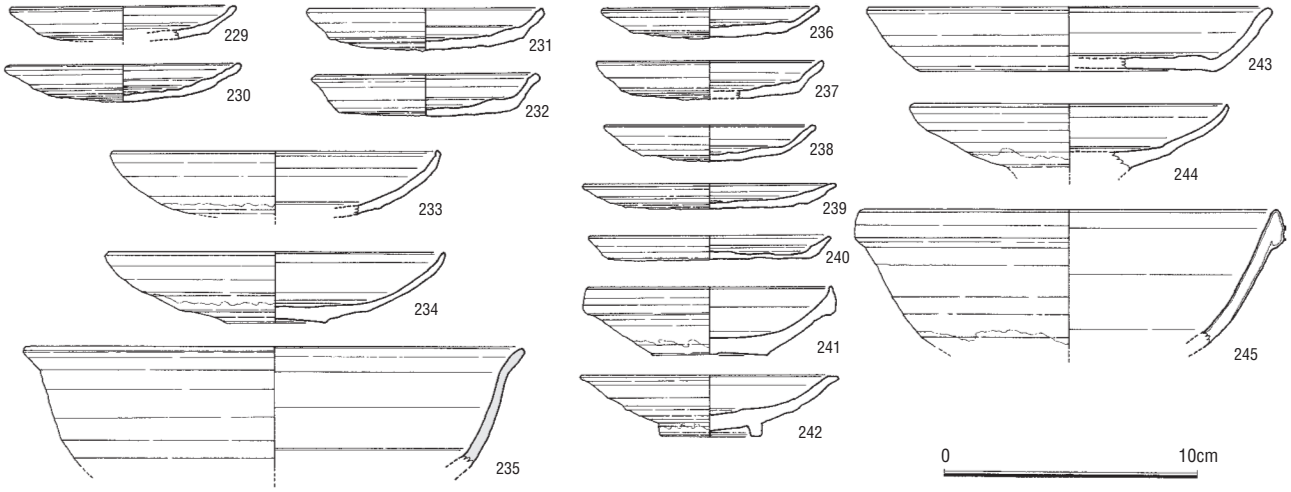


Fig.39　出土遺物実測図（S＝1／3）

242 は白磁高台付皿で、241は玉縁状口縁を持つ。241・244は白磁平底皿である。245は白磁玉縁碗である。

出土遺物より遺構の時期は12世紀代初頭が考えられる。

SK-302（Fig-40）

第3面拡張区北側で検出した廃棄土坑で、西側は調査区壁面に位置するため、遺構の東側のみ完掘した。長軸1.5ｍ前後の楕円形土坑で、検出面から土坑底面までの深さは80cm前後を測る。埋土は上層に暗褐色砂質土、下層に黒褐色砂質土と炭化物を多く含む暗褐色粘質土が堆積する。埋土から土師器・白磁・獣骨などの遺物が出土した。

出土遺物をFig-42に示した。

246・247は土師器小皿である。底部はいずれも糸切り調整される。248は青白磁合子蓋である。249は龍泉窯系青磁皿である。外底部まで施釉し、内面見込みには片切彫りと櫛描文による草花文を施す。250は瓦器椀であ

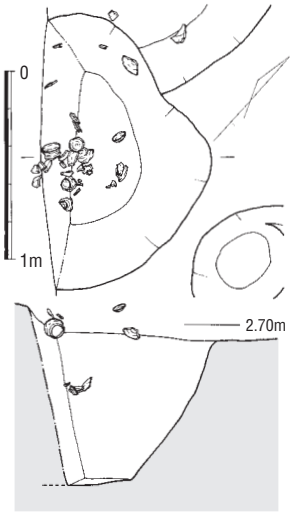


Fig.40　SK-302実測図（S＝1／40）

る。外器面に横位のヘラ磨きを施し、内器面には斜位のヘラ磨きを施し、口縁部付近はナデ調整を施す。焼成は良好で色調は黒灰色を呈する。251は白磁碗である。高台部上まで施釉する。252は白磁壺口縁部である。253～256は白磁玉縁碗である。253は体部下半にヘラナデ痕が残る。いずれも釉調は乳灰白色を呈する。

出土遺物より遺構の年代は12世紀代中頃の時期が考えられる。

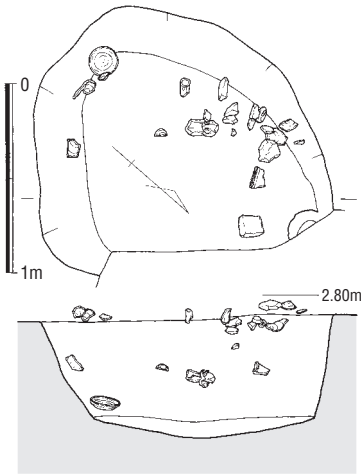


Fig.41　SK-303実測図（S＝1／40）

SK-303（Fig-41）

第3面拡張区北側で検出した土坑で、平面形は直径1.5ｍ前後の不整円形を呈する。遺構上面には支保工設置のための攪乱抗が存在しており、上層部は若干の攪乱を受ける。検出面から土坑底面までの深さは60cm前後を測る。埋土は暗褐色砂質土で焼土・炭化物層を中間に挟んで堆積する。遺物は下層からヘラ切り・糸切りの土師器・白磁・瓦などが出土し、上層からは上面からの混入遺物である染付碗･陶器などが出土した。遺構が拡張区と東側調査区の間に残る土層に位置していたため、遺構検出が不十分なまま遺構上面の掘り下げを行っている。この土層壁面が崩壊する恐れがあったことと土層断面観察のために遺構北側については完掘していない。

Ph.51　SK-302遺物出土状況（北東から）

Ph.52　SK-303遺物出土状況（南から）

Ph.53　SK-303遺物出土状況（南東から）

出土遺物をFig-42に示した。

257は白磁口禿皿である。口縁部の釉を拭き取り露胎とする。258は底部を糸切り調整した土師器坏である。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。259は龍泉窯系青磁平底皿である。釉調は暗オリーブ色を呈する。260は白磁碗である。口縁部は端部で外反する器形で体部下半まで施釉する。釉調は、乳灰色を呈する。261は白磁玉縁碗である。高台部付近に成型時のヘラナデ痕が観察できる。体部中程まで施釉し、釉調は乳灰白色を呈する。

262は染付碗で上面からの混入品である。263は青白磁碗である。内器面に草花文を施す。

264は獅子瓦か。土坑底面から30cm程度の高さの位置から出土した。前面を下にした状態で検出される。上半部が欠損しているため、全体の形状を把握することはできないが、下顎部が残っており獣面を模していることが分かる。下半部は断面形が三角形となるが、これまでで行われた博多遺跡群内調査で出土した瓦類で類似する形態のものがなく、詳細

は不明である。取り付けられる部位も中世期の日本建築様式では該当する箇所がなく、今後の類例の増加が期待される。

265～267は軒平瓦である。265は264とほぼ同じ高さより出土したもので、同一建物に使用された瓦か。この他の遺物としては、一辺15cm、厚さ4cm程度の磚が出土している。焼成は良好で、色調は淡赤褐色から褐色を呈する。

これらの出土遺物より遺構の時として12世紀代前半頃の年代が考えられる。

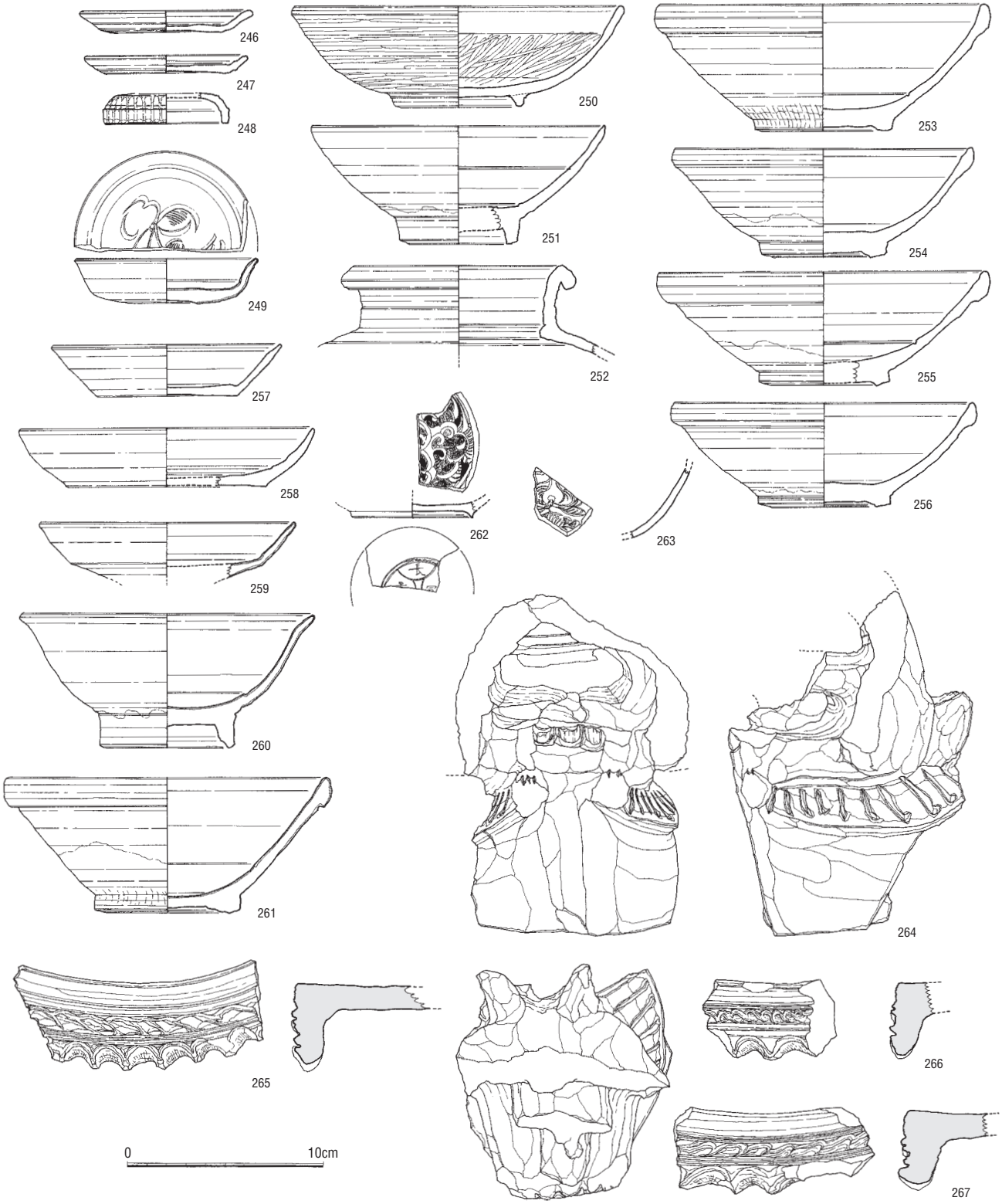


Fig.42　出土遺物実測図（S＝1／3）

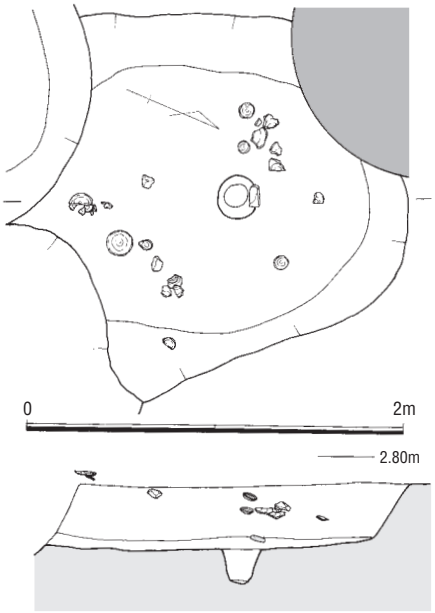


Fig.43　SK-310実測図（S＝1／40）

SK-310（Fig-43）

第3面西側で検出した土坑である。四方を他の遺構に切られ、正確な平面形は把握できない。現状で長軸2.2ｍ以上、短軸2.0ｍ、検出面から土坑底面までの深さは35cmを測り中心部に直径20cmの土坑が検出される。埋土は炭化物を含む暗褐色砂質土で、埋土中から土師器・白磁などの遺物が出土する。用途としては廃棄土坑と考えられる。出土遺物をFig-44に示した。

268～270は土師器小皿である。270のみが糸切り調整され、他はヘラ切りされる。271～273は土師器坏である。いずれもヘラ切りされた底部を持つ。274は白磁玉縁碗である。275～277は白磁平底皿である。278は高麗青磁碗高台部である。279は白磁小碗である。高台内に墨書を有する。280～282は白磁玉縁碗である。283は土師器支脚で、色調は灰褐色を呈する。284･285は須恵器蓋、286は須恵器碗である。埋土からの出土であるが他の遺構からの混入品である。287・288は瓦器椀である。287の内器面は斜格子状のヘラ磨きが施される。289は同安窯系青磁碗で、混入品である。

これらの出土遺物より遺構の時期は11世紀代後半と考えられる。

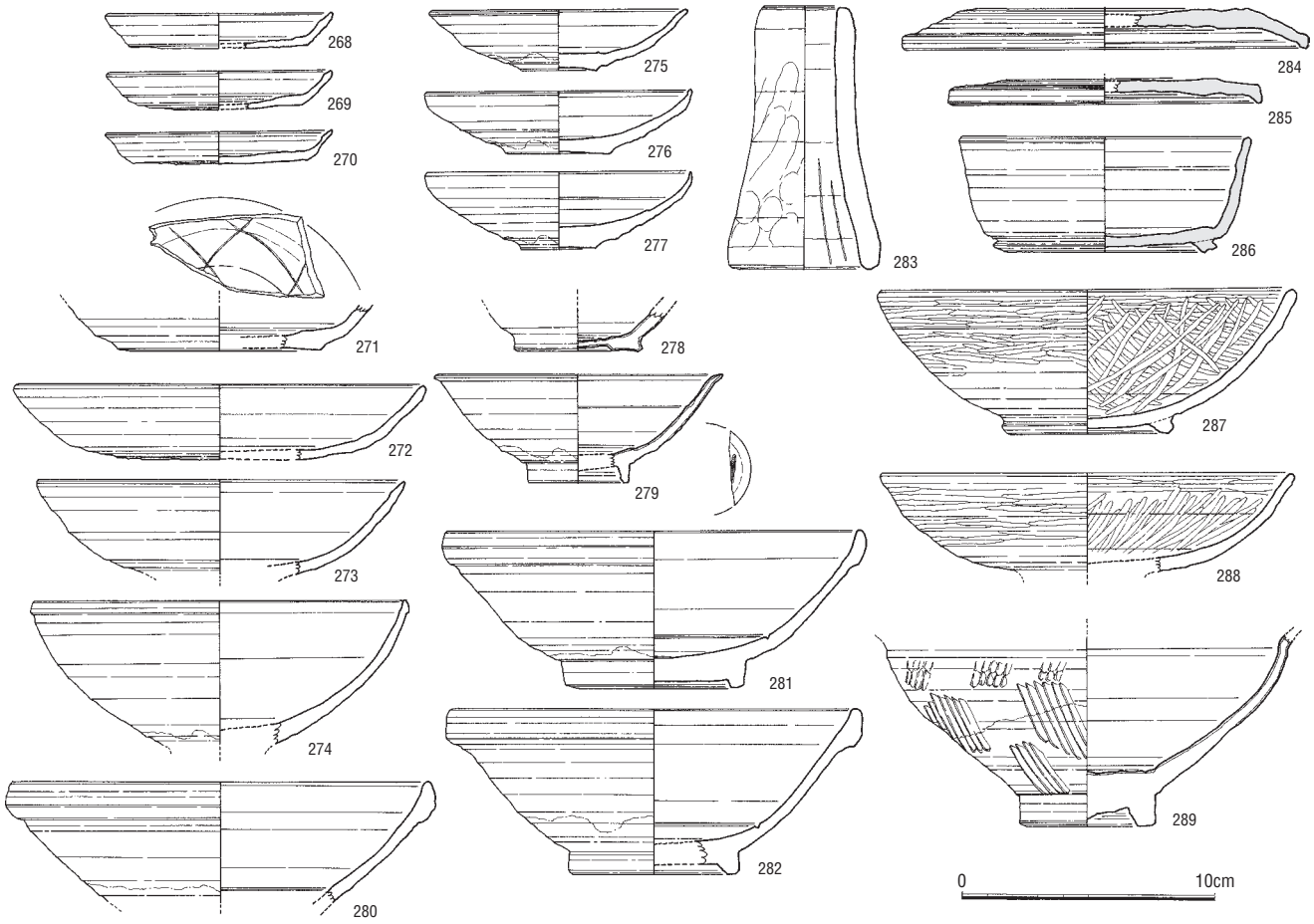


Fig.44　出土遺物実測図（S＝1／3）

SK-316（Fig-45）

第3面の拡張区掘り下げ時に検出した廃棄土坑で、長軸1.2ｍ程度、短軸1.0ｍ前後を測る。炭化物・焼土を多く含む暗黄灰褐色粘質土の埋土で、拳大の礫・土師器・白磁・青磁などの遺物が出土する。遺構検出は標高3.20ｍ付近で行ったが、土層断面の観察から第2面直下の3.80ｍ付近からの掘り込みであったことがわかる。掘り下げ時には遺物の出土はなく、遺物は土坑底面部付近に集中していたものと考えられる。

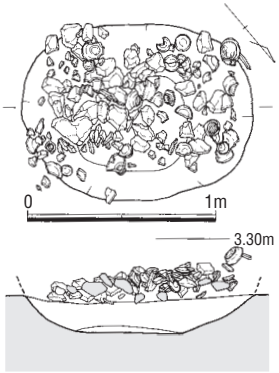


Fig.45　SK-316実測図（S=1／40）

出土遺物をFig-46に示した。

290は糸切りの土師器坏である。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。291～293は同安窯系青磁平底皿である。292・293は内面見込みに櫛描文と片切彫りにより装飾を施す。外底部付近まで施釉し、底部は露胎とする。釉調は緑乳灰色を呈する。294は同安窯系青磁碗である。外器面には櫛描文、内器面には片切彫りと櫛描文で装飾を施す。体部中程まで施釉し、以下を露胎とする。釉調は緑乳灰色を呈する。295・296は龍泉窯系青磁碗である。内器面に片切彫りによる装飾を施す。釉調はいずれもオリーブ色を呈する。

遺物とともに検出される拳大の礫はいずれも被熱のため、赤変化している。

これらの出土遺物より遺構の時期としては13世紀代前半頃の時期が考えられる。

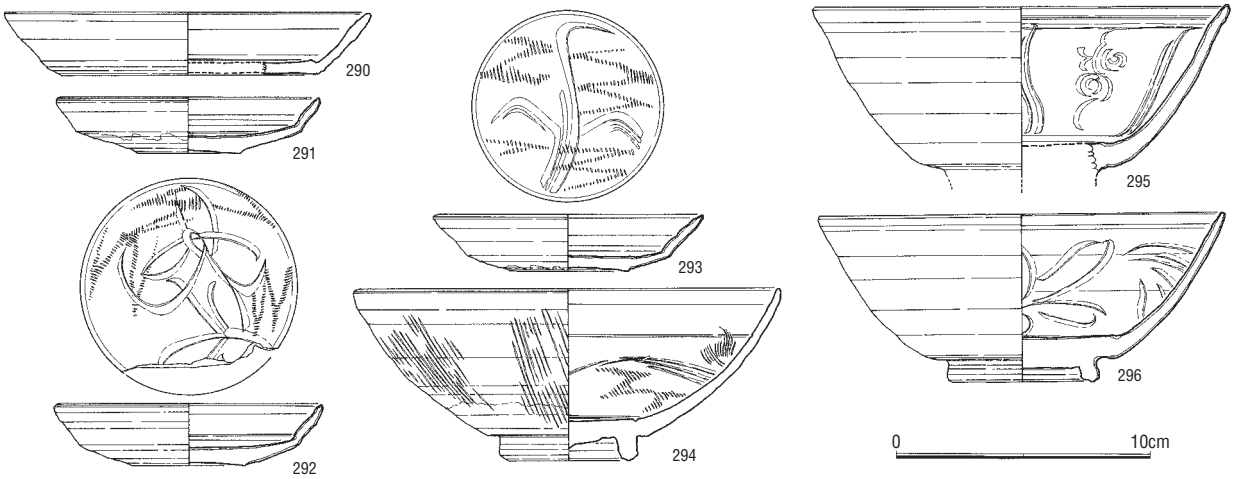
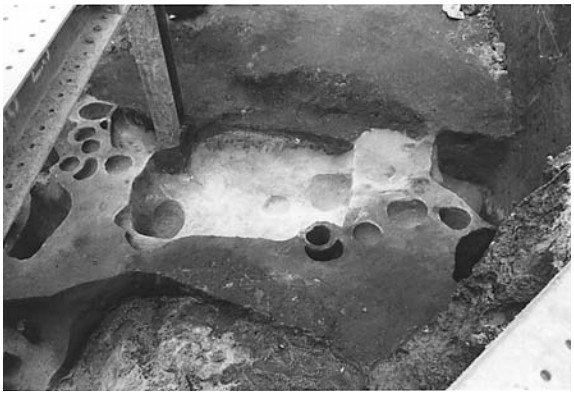


Fig.46　出土遺物実測図（S＝1／3）


Ph.54　SK-321完掘状況（南西から）

Ph.55　SK-316遺物出土状況（南から）

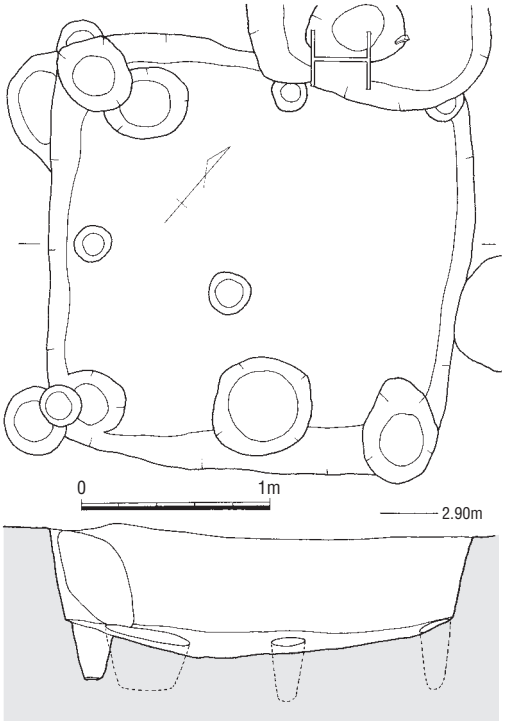


Fig.47　SK-321実測図（S＝1／40）

SK-321（Fig-47）

第4面南側の褐色砂層面上で検出した方形土坑である。一辺は2.2ｍ前後で、検出面から土坑底面までの深さは65cm前後を測る。土坑の四隅には土坑底面からの深さ30cm前後の柱穴を配していることなどから、竪穴住居の可能性も考えられる。隣接する第88次調査では9世紀の溝があるが、土坑底面から竈などに伴う焼土面などは検出されなかったため、判別しがたい。埋土は暗褐色砂質土で須恵器・土師器などの遺物が出土する。

出土遺物をFig-48に示した。

297は須恵器碗である。断面形が台形の高台を外底部付近に貼り付ける。体部は直線的に開く器形で焼成は良好、色調は灰褐色を呈する。

出土遺物より遺構の時期は9世紀代前半頃の年代と考えられる。

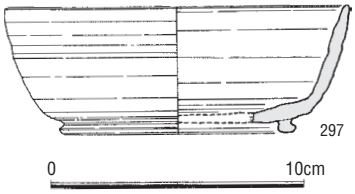


Fig.48　出土遺物実測図（S＝1／3）

SK-329（Fig-49）

第4面南側で検出した土坑で、支保工支持のため打設されたＨ鋼により南側を攪乱されている。長軸1.3ｍ×短軸1.0ｍの楕円形土坑で底面には段を有する。遺構の埋土は暗褐色砂質土で土師器・白磁などが出土する。

出土遺物をFig-50に示した。

298は土師器小皿である。底部は糸切り調整される。焼成良好で、色調は褐色を呈する。299・300は土師器坏である。底部は糸切り調整され、板目圧痕を持つ。焼成は良好で色調は暗褐色を呈する。301 は白磁碗である。体部下半まで施釉する。302は白磁玉縁碗である。体部上半部を施釉し、以下を露胎とする。釉調は乳灰白色を呈する。

出土遺物より遺構の時期は12世紀代前半頃が考えられる。

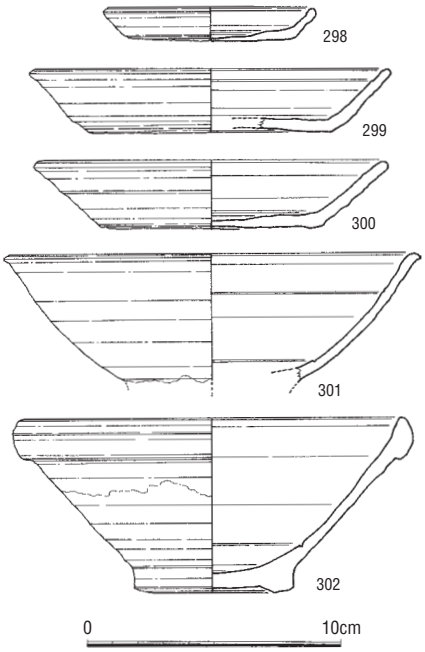


Fig.50　出土遺物実測図（S＝1／3）

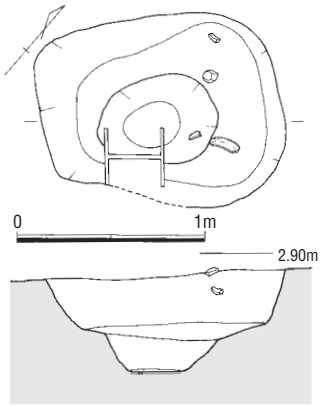


Fig.49　SK-329実測図（S＝1／40）

SK-337（Fig-51）

第4面拡張区で検出した楕円形土坑である。長軸1.2ｍ×短軸1.0ｍ、検出面から土坑底面までの深さは1.0 ｍを測る。土坑底面西側に段を有する。土坑南東側にはＨ鋼が打設され、周辺部は埋土・遺物ともに攪乱される。攪乱されていない部分での埋土は炭化物・焼土を含む黒褐色砂質土で、土師器・瓦器・白磁碗などの遺物が出土した。

出土遺物をFig-52に示した。

303は白磁小壺の蓋である。304は白磁蓋である。固定用の紐通し孔が穿孔される。下面を施釉し、上面を露胎とする。305は瓦器小皿である。外器面は横位のヘラ磨きを施し、内器面には斜位のヘラ磨きを施す。外器面の一部は磨きによって銀化する。306は白磁平底皿である。体部中程まで施釉する。釉調は緑乳灰色を呈する。307は白磁小碗である。体部下半まで施釉し、以下を露胎とする。釉調は乳灰色を呈する。308は須恵器碗である。高台の断面形は方形を呈する。色調は灰褐色を呈する。

309～311・313～317は白磁碗である。309は体部下半にヘラナデ痕が残る。体部は直線的に立ち上がる。310・313は口縁端部でわずかに外反する。317は端部で内反する口縁部を持つ。いずれも体部下半まで施釉し、以下を露胎としている。312は須恵器蓋である。復元口径は22.0cmを測る。焼成は良好で、色調は濃灰色を呈する。318は伊万里焼青磁平皿である。H鋼打設により上面の遺構から混入したものである。器面に焼成時の亀裂があり、螺鈿細工により花弁状に補修する。畳付きのみ露胎とする。319は白磁瓜型壺である。外底部上まで施釉し、底部を露胎とする。

これらの出土遺物より遺構の時期は12世紀代前半頃の年代と考えられる。

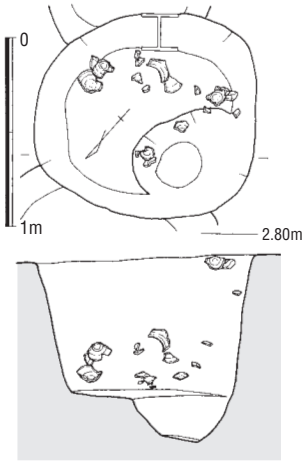


Fig.51　SK-337実測図（S＝1／40）

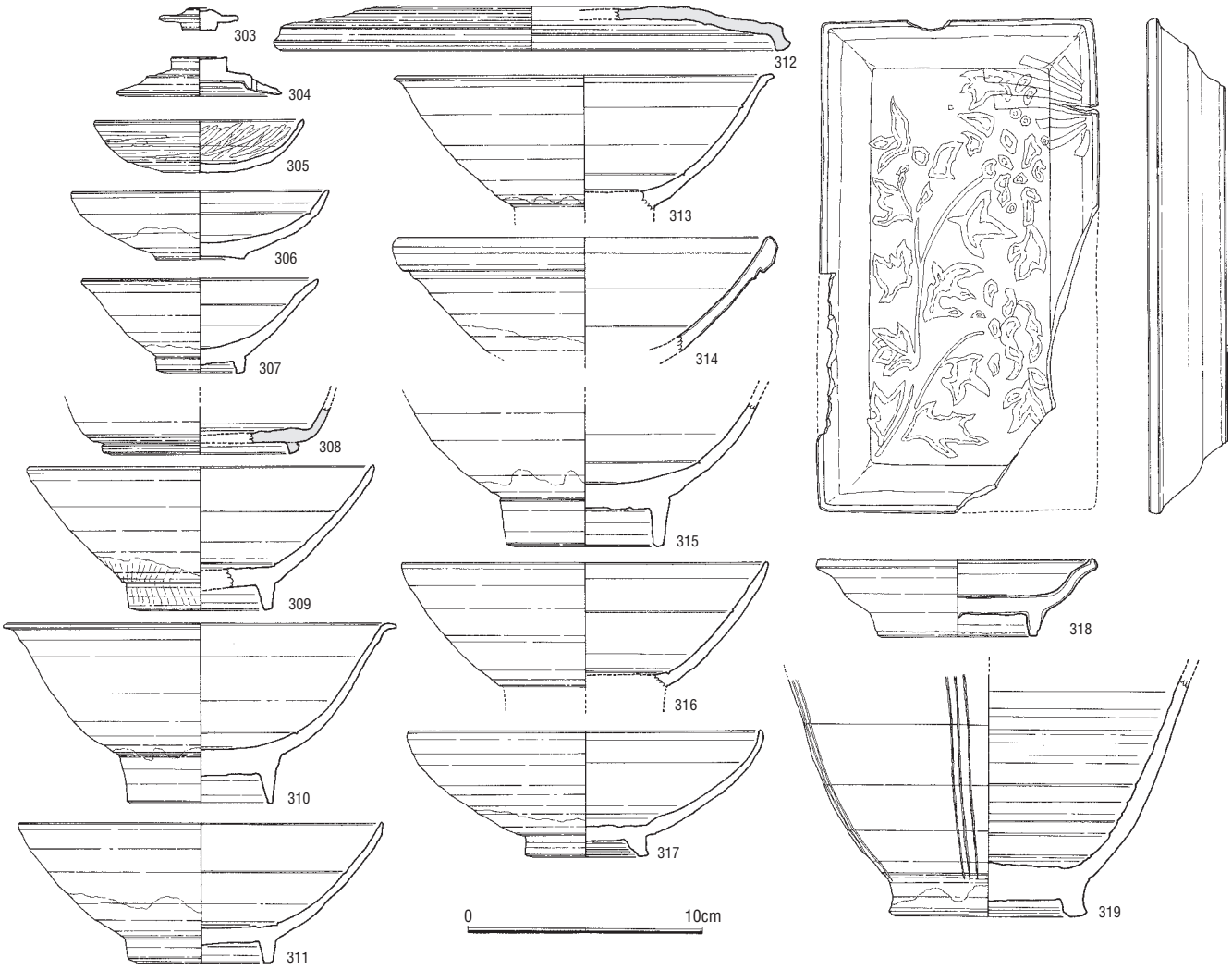


Fig.52　出土遺物実測図（S＝1／3）

4. その他の出土遺物

これまでの報告で触れられなかった遺物のうち、重要と思われるものについて遺構出土遺物・包含層出土遺物にわけて簡単に説明を行いたい。

Ph.56　SK-337遺物出土状況（北西から）

a．遺構出土遺物（Fig-53）

320は第1面SK-005出土の明染付碁笥底皿である。321もSK-005出土の明染付碗である。

322はSK-010から出土した龍泉窯系青磁碗である。323はSK-035出土の白磁花皿である。324はSK-035出土の肥前系青磁扁壺である。325はSK-048出土の高麗陶器壺胴部片である。外器面に象嵌で装飾を施す。326～328は天目茶碗である。326はSK-048出土、327はSK-057出土、328はSK-073から出土した。329はSK-169出土の土師器蓋である。天井部はヘラ切りし、色調は褐色を呈する。330は青白磁小壺である。SK-229より出土した遺物で、内器面は露胎となる。331はSK-187出土の白磁平底皿である。内面見込みに片切彫りによる装飾を施す。外底部まで施釉する。332はSK-268出土の古式土師器器台脚部片である。

b．包含層出土遺物（Fig-54～56）

333は須恵器蓋である。色調は濃灰色を呈する。334・335は古式土師器小型丸底壺である。334は外器面に密なヘラ磨きを施し重複して縦位の刷毛目調整を加え、内器面は二種類の刷毛目調整を施す。335は底部をヘラ削りで調整する。いずれも焼成は良好で色調は橙色を呈する。336は古式土師器壺である。外器面には縦位の刷毛目調整を施し、横位の沈線と刷毛目調整を加える。色調は暗褐色を呈する。334～336は第4面褐色砂層面上でまとまって3個体が出土した。337は土師器甕である。外器面は縦位の刷毛目調整を基本とし横位の刷毛目調整を加える。胎土はやや粗雑で、色調は橙色を呈する。338は底部を欠損する古式土師器丸底壺である。頸部から口縁部は縦位の刷毛目調整、体部外器面にはヘラ磨きを施す。内器面は体部をナデ調整し、口縁部付近は刷毛目調整を施す。焼成良好で、色調は暗褐色を呈する。

339は陶器の翁面である。340は同安窯系青磁碗である。341は白磁合子身である。外器面は体部中程まで施釉し、以下を露胎とする。釉調は乳灰白色を呈する。342～345は第2面下掘り下げ時に出

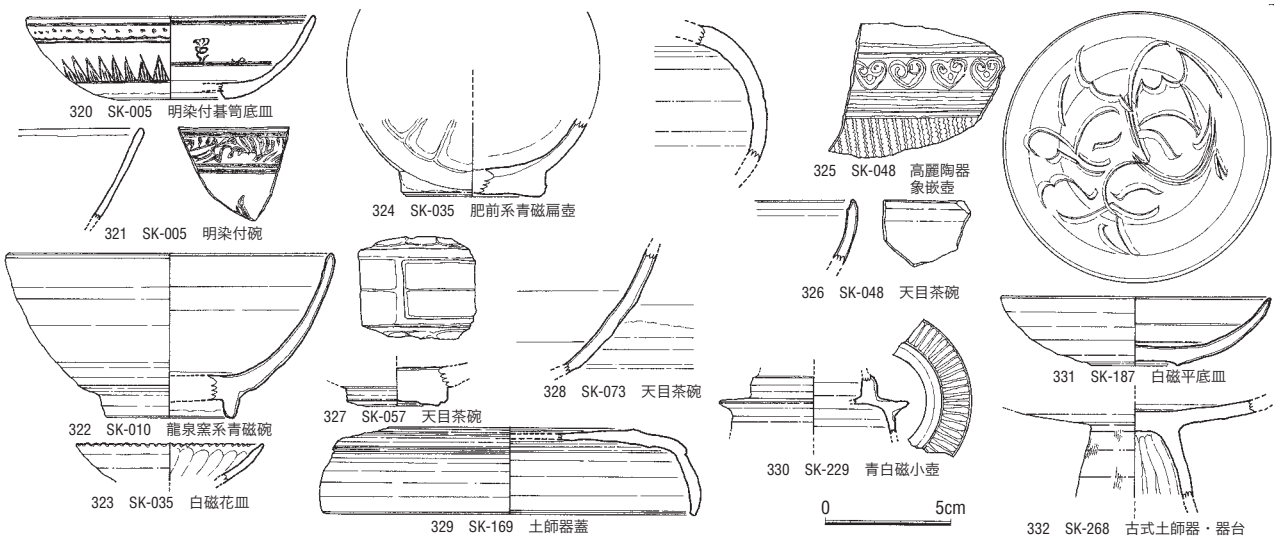


Fig.53　その他の出土遺物1（S＝1／3）

土した白磁高台付皿である。346～350は白磁平底皿である。これらも第2面下掘り下げ時に出土した遺物である。これらの遺物は掘り下げ時に集中して出土しており、検出できなかった廃棄土坑などに一括廃棄された遺物群である可能性が考えられる。いずれも釉調は緑灰褐色を呈する。351・352は龍泉窯系青磁碁笥底小盤である。353は第1面下掘り下げ時に出土した緑釉陶器埦底部片である。354は緑釉陶器埦である。355は茶釉茶入である。356は吉州窯系白磁鉄絵壺胴部片である。357は茶釉陶器小壺である。358は白磁小壺である。底部を露胎とする。359は白磁小碗口縁部片である。360は粉青沙器印花文壺である。361･362は白磁碗である。363は越州窯系青磁碗である。内面に砂目が残る。

364は第2面下掘り下げ時出土の東播系山茶碗底部片である。365～367･369～371は天目茶碗である。

372は青白磁碗である。体部にはヘラナデ痕が残り、内面見込みに櫛描文を施す。373は青白磁高台付皿である。内面見込みに櫛描文による装飾を施す。外底部まで施釉する。374～376は第2面下掘り下げ時に出土した龍泉窯系青磁平底皿である。いずれも内面見込みに櫛描文、片切彫りによる装飾を持つ。釉調はオリーブ色を呈する。377は朝鮮茶釉陶器船徳利である。釉調は暗茶褐色を呈する。

378・379は第1面下掘り下げ時に出土した河南天目壺口縁部片である。380は第2面下掘り下げ時に出土した土師質土器土鍋である。外器面には煤が付着する。

Fig-56-381は高麗青磁碗である。高台内まで型押しと片切彫りによる装飾が施される。蓋とも考えられたが、内面には使用痕が見られるため碗と判断した。畳付きのみ露胎とする。拡張区第2面下掘り下げ時に出土した遺物で、12世紀前半代の時期が考えられる。

382・383・387・392～394・397は青白磁合子蓋である。382・383は第2面下掘り下げ時に出土した遺物で、釉調は黄褐色を呈する。384・391は青白磁小壺蓋である。384は被熱のため、釉が一部熔け落ちる。中心部に3カ所の穿孔が見られる。釉調は青緑色を呈する。385は青白磁小壺胴部片である。外器面に印花文を施す。386・388・398は青白磁合子身である。いずれも体部下半まで施釉し、底部を露胎とする。釉調は青緑色を呈する。395は第2面下掘り下げ時に出土した青白磁皿胴部片である。

396は青磁平底皿胴部片である。内面に線刻による印花文を施す。釉は被熱により熔け落ちる。

389は青白磁口禿皿である。内面に雷文を施す。390は青白磁梅瓶胴部

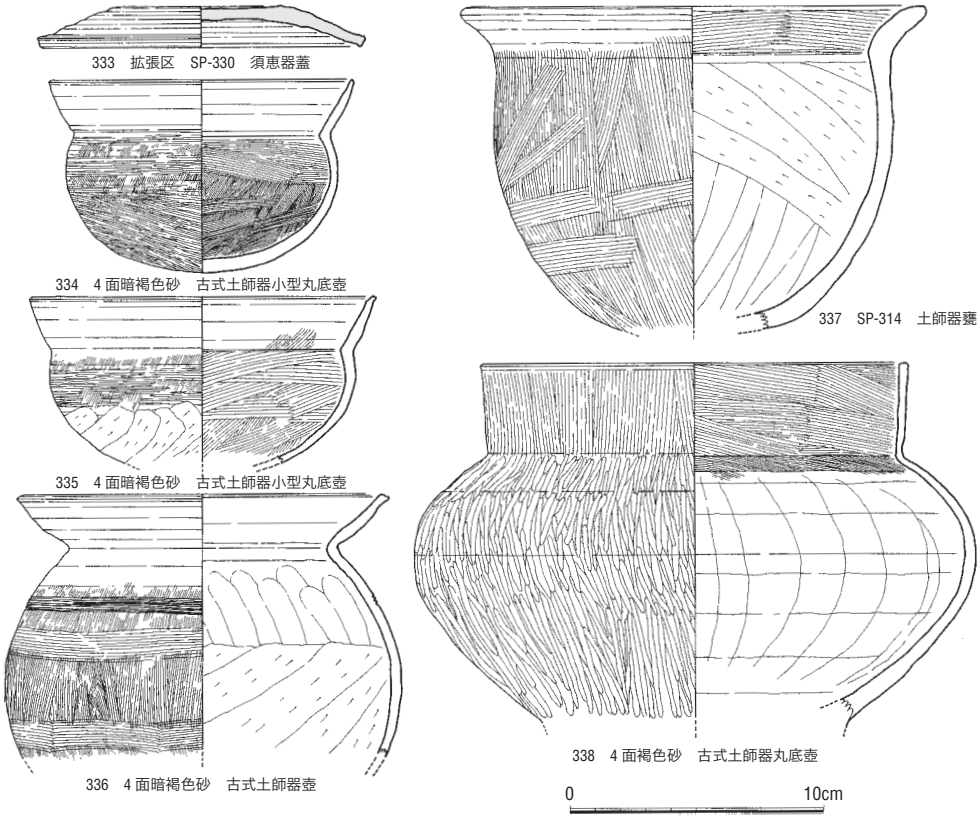


Fig.54　その他の出土遺物2(S＝1／3)

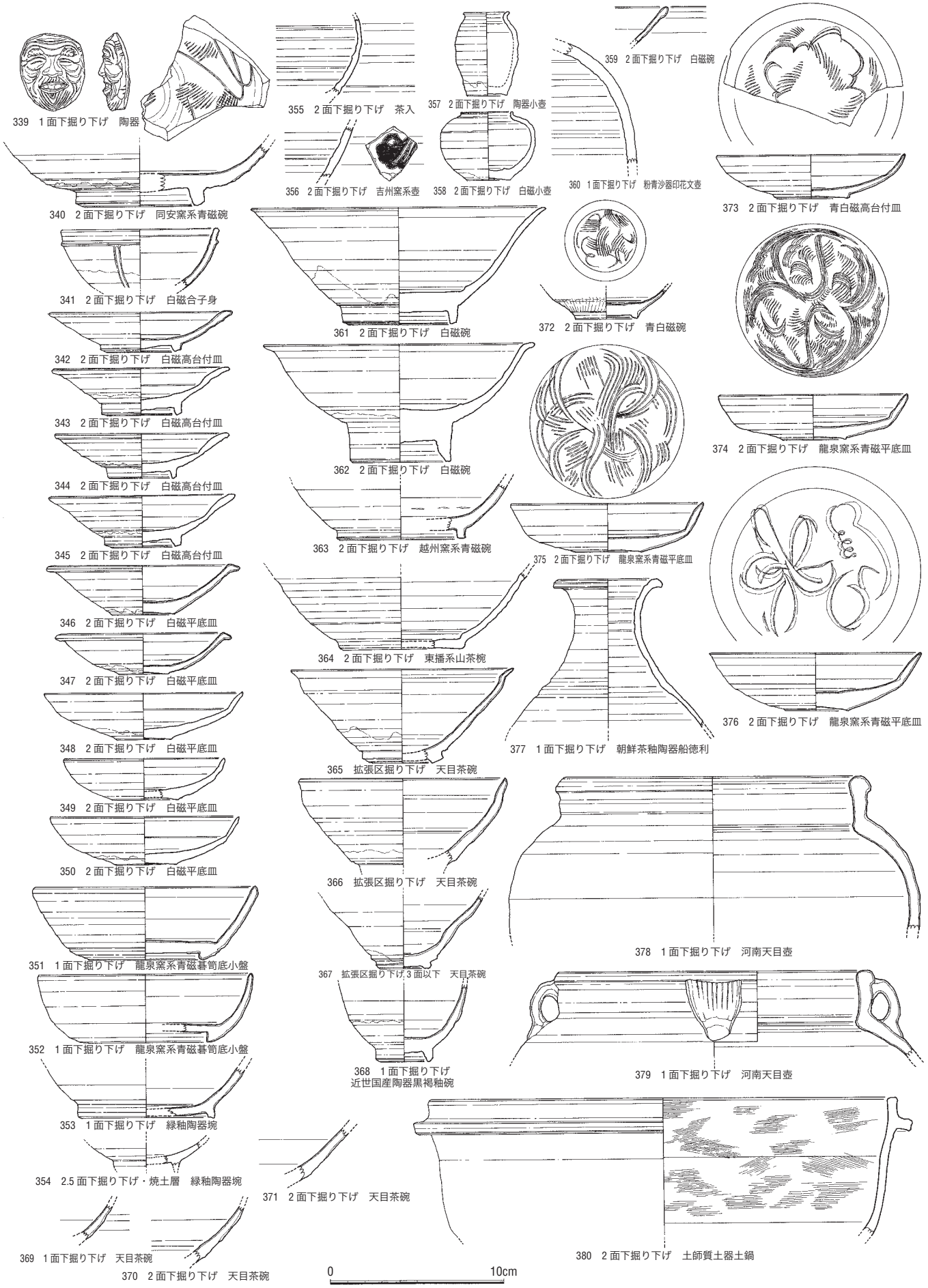


Fig.55　その他の出土遺物3(S＝1／3)

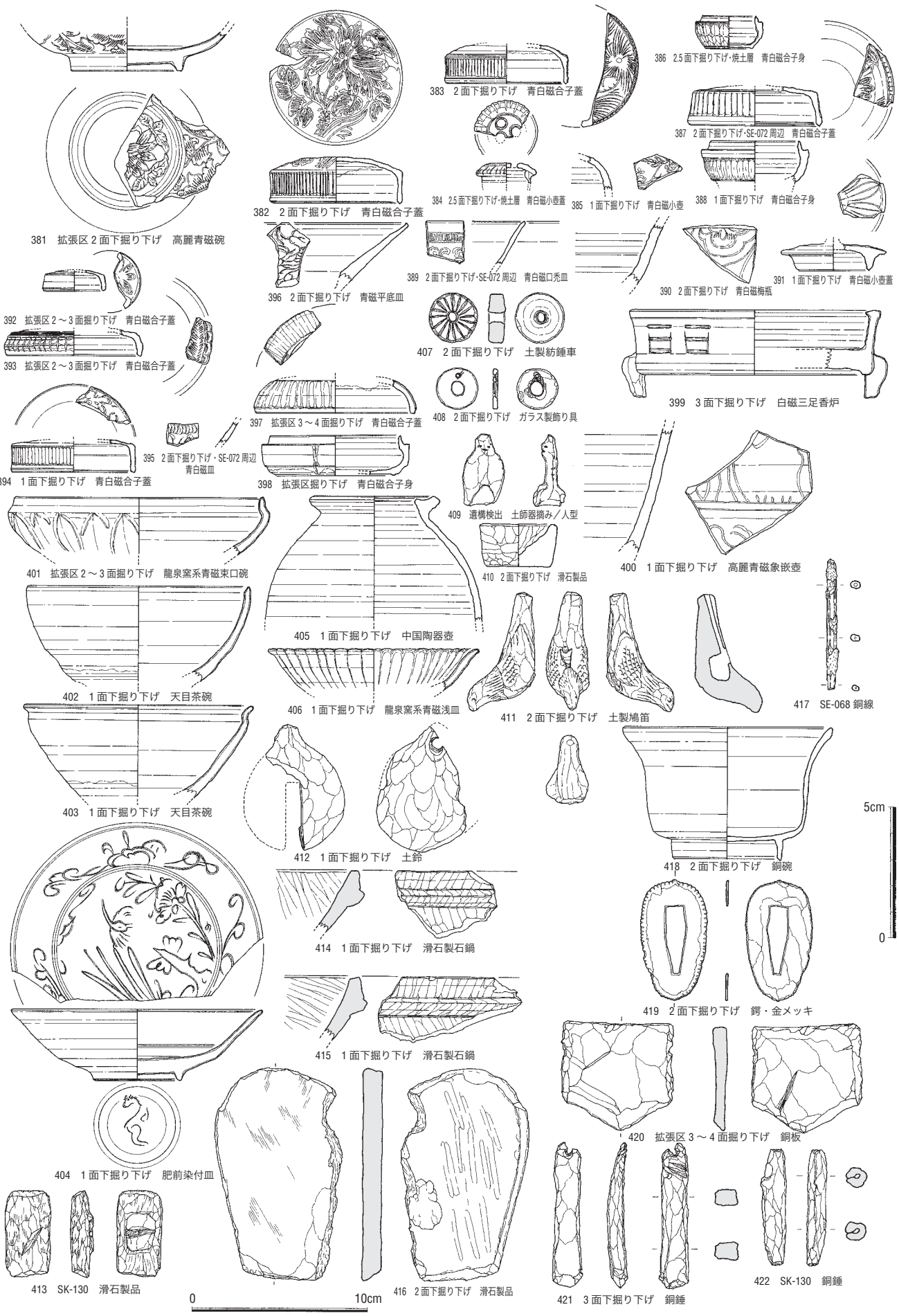


Fig.56　その他の出土遺物4（S＝1／2・1／3）

片である。外器面には唐子蓮花唐草文を施しており、釉調は青緑色を呈する。399は第3面下掘り下げ時に出土した白磁の三足香炉である。底部・内底部を露胎とする。釉調は明オリーブ色を呈する。400は高麗青磁象嵌壺である。第1面下掘り下げ時に出土した。

401は龍泉窯系青磁束口碗である。外器面には鎬蓮弁文を施し、釉調は暗オリーブ色を呈する。

402・403は第1面下掘り下げ時に出土した天目茶碗である。404は第1面下掘り下げ時に出土した肥前染付皿である。畳付きを露胎とし、高台内には馬を描く。405は中国陶器黒釉壺である。

406は第1面下掘り下げ時に出土した龍泉窯系青磁浅皿である。釉調は明オリーブ色を呈する。

407は第2面下掘り下げ時出土の土製紡錘車である。片面に放射状に線刻を行う。408は第2面下掘り下げ時に出土したガラス製飾り具である。中心孔上部に留紐用の穿孔を行う。背面には接合痕があり、武具などの飾り具として用いられたものと考えられる。409は人型の土製品である。底部付近が欠損する。手捏ねで成形され、刺突具により目と口が表現される。色調は褐色を呈する。

410は滑石製の容器である。器面全体に加工痕が明瞭に残り、底面は平坦に成形される。第2面下掘り下げ時に出土した。411は第2面下掘り下げ時に出土した土製の鳩笛である。型作りの貼り合わせで形成され、目は刺突具で表現される。一部が欠損するが笛としての機能は失われておらず使用できる。412は土鈴である。413は滑石製品である。上面には摘み基部が残り、穿孔内には木質が残存する。414・415は滑石製石鍋である。外器面には煤が付着して状態で出土した。416は滑石製品である。石鍋の転用品で両面に使用痕が残る。417は銅線である。仏具の一部と考えられる。418は第2面下掘り下げ時出土の銅製碗である。仏具である。419は鍔である。厚さ1.5㎜程度で遺存状態は良好ではないが、前面側縁部に塗金が残る。420は銅製品である。421・422は銅錘である。422は銅板を丸めて錘とする。

Ph.57　出土遺物

Ph.58　出土遺物

Ph.59　出土遺物

Ph.60　出土遺物

c．墨書土器（Fig-57 ～ 60）

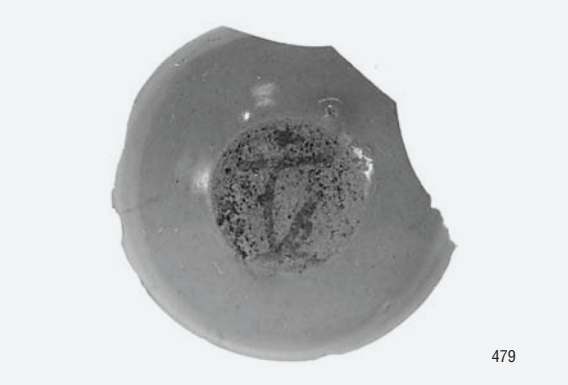
第145次調査では、90点の墨書土器が出土した。墨書部が完損している資料は少なく、判読不能な個体が多い。出土した器種の内訳は土師器9点、須恵器1点、貿易陶磁器類80点となり、白磁碗高台内に墨書された資料が圧倒的に多く出土する。なお、出土地点・器種は図中に示した。

調査は250㎡の対象面積について行ったが、壁面養生や安全確保のため実際に遺構の調査を実施したのは200㎡程度であり、調査面積の割合から出土した墨書土器の比率としては比較的高いものである。欠損などにより判読不能に資料が半数以上で、判読できる資料についても花押を記した墨書土器が多く見られる。博多遺跡群内出土の墨書土器においても類例が多く見られる「綱」を記した墨書土器は、本調査からは出土していない。判読できる資料としては「大」「房」「十」「銭」「王」「久冨」等があり、習字や絵画と見られるものもある。特徴的な墨書土器について説明を行う。

480は中国陶器鉢である。内器面の器面が剥落した部位に墨書される。489は糸切りの土師器小皿である。底部に広範囲に墨が見られるが、判読できない。493は土師器坏である。底部は糸切り調整され、板目圧痕が残る。底部から側面にかけて墨書される。絵画か。509は土師器支脚の墨書土器である。拡張区第4面遺構検出時に出土した遺物で、脚前面に墨書される。

出土した墨書土器のなかでも注目される資料としては、Fig-60-510の彩色墨書土器である。拡張区第3面で検出したSK-303から出土した墨書土器で、糸切りの土師器坏底面に猿面が描かれる。類例としては博多遺跡群第36次調査では土師器皿の底面に人面を描いた墨書土器が出土しているが、本資料は墨書で目・鼻を描き、顔面を朱等の赤色顔料で彩色している。額の部分には墨書と朱による隈取りを放射状に描いており、猿面と判断した。12世紀前半代の時期に属する遺物である。

Ph.61　墨書土器



Ph.62　墨書土器

Ph.63　墨書土器

Ph.64　墨書土器

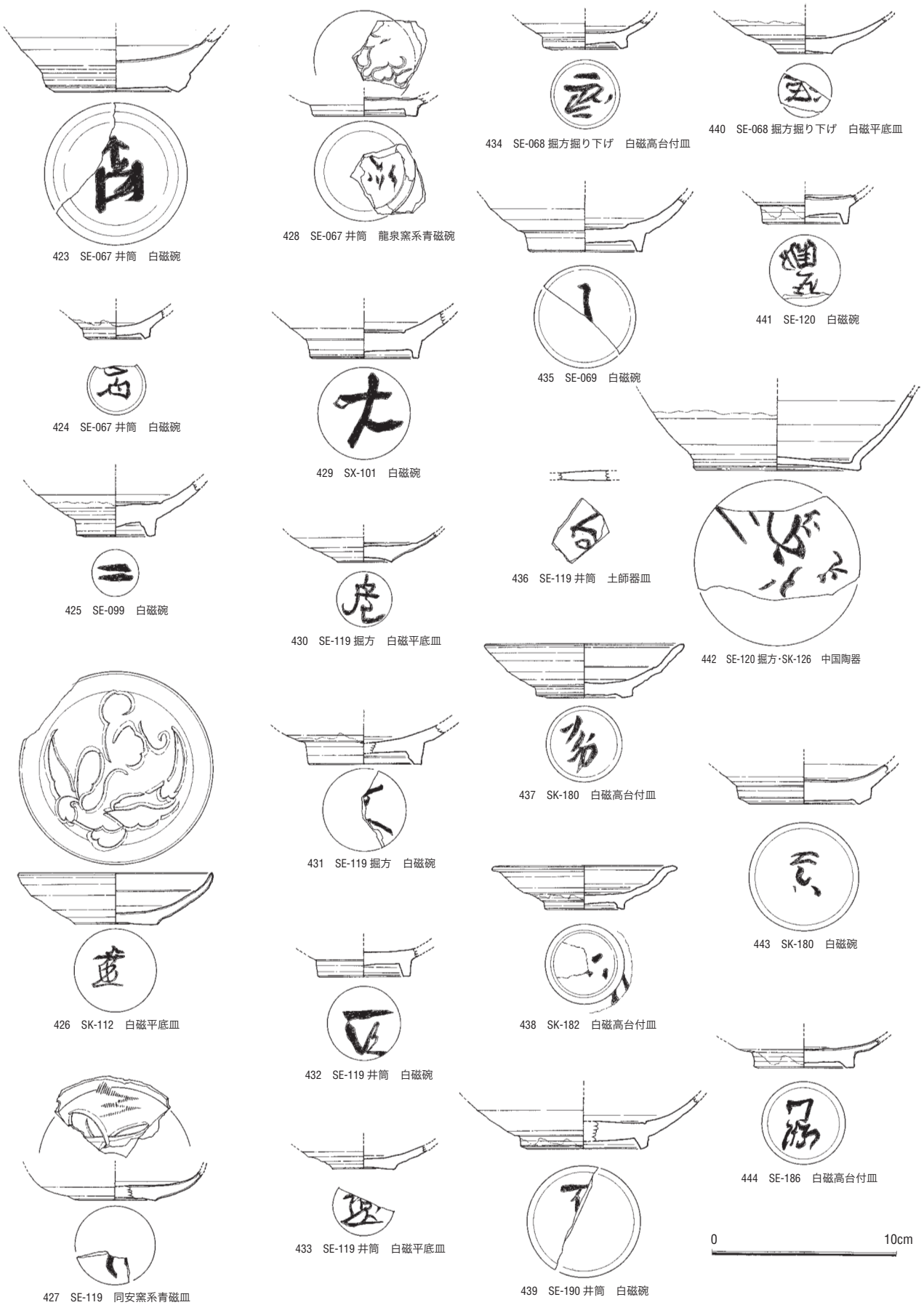


Fig.57　墨書土器実測図1（S＝1／3）

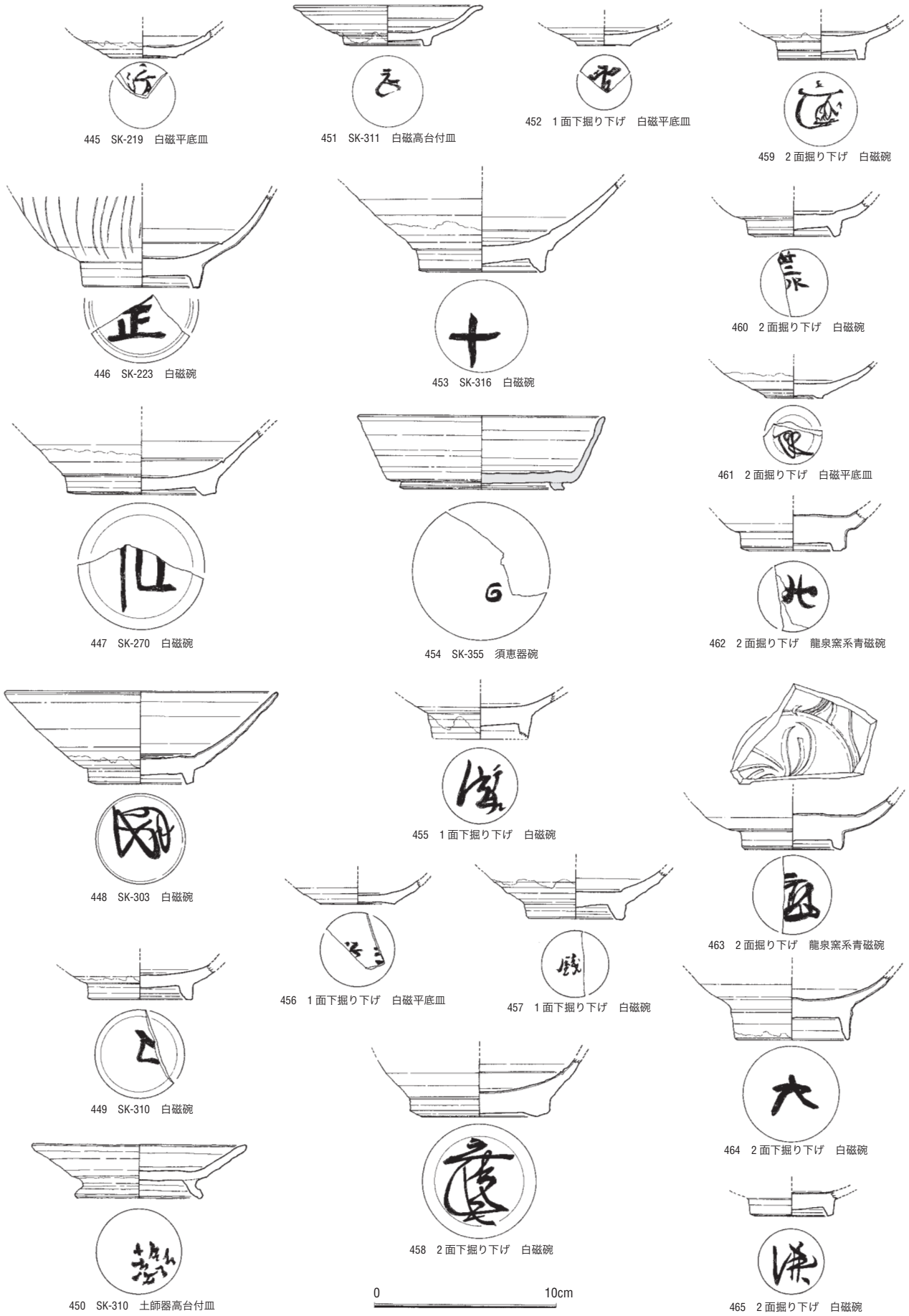


Fig.58 墨書土器実測図2(S＝1／3)

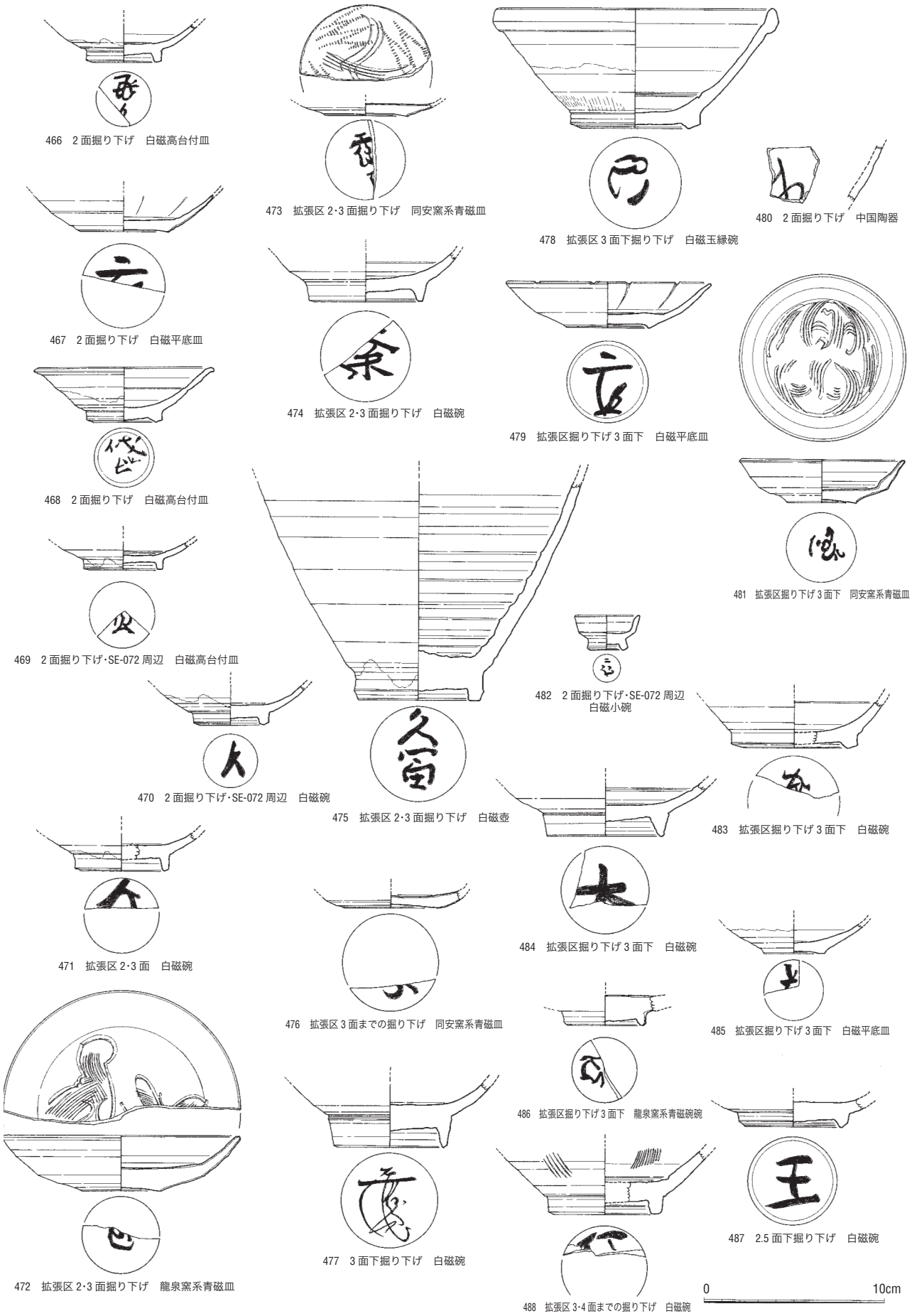


Fig.59　墨書土器実測図3(S＝1／3)

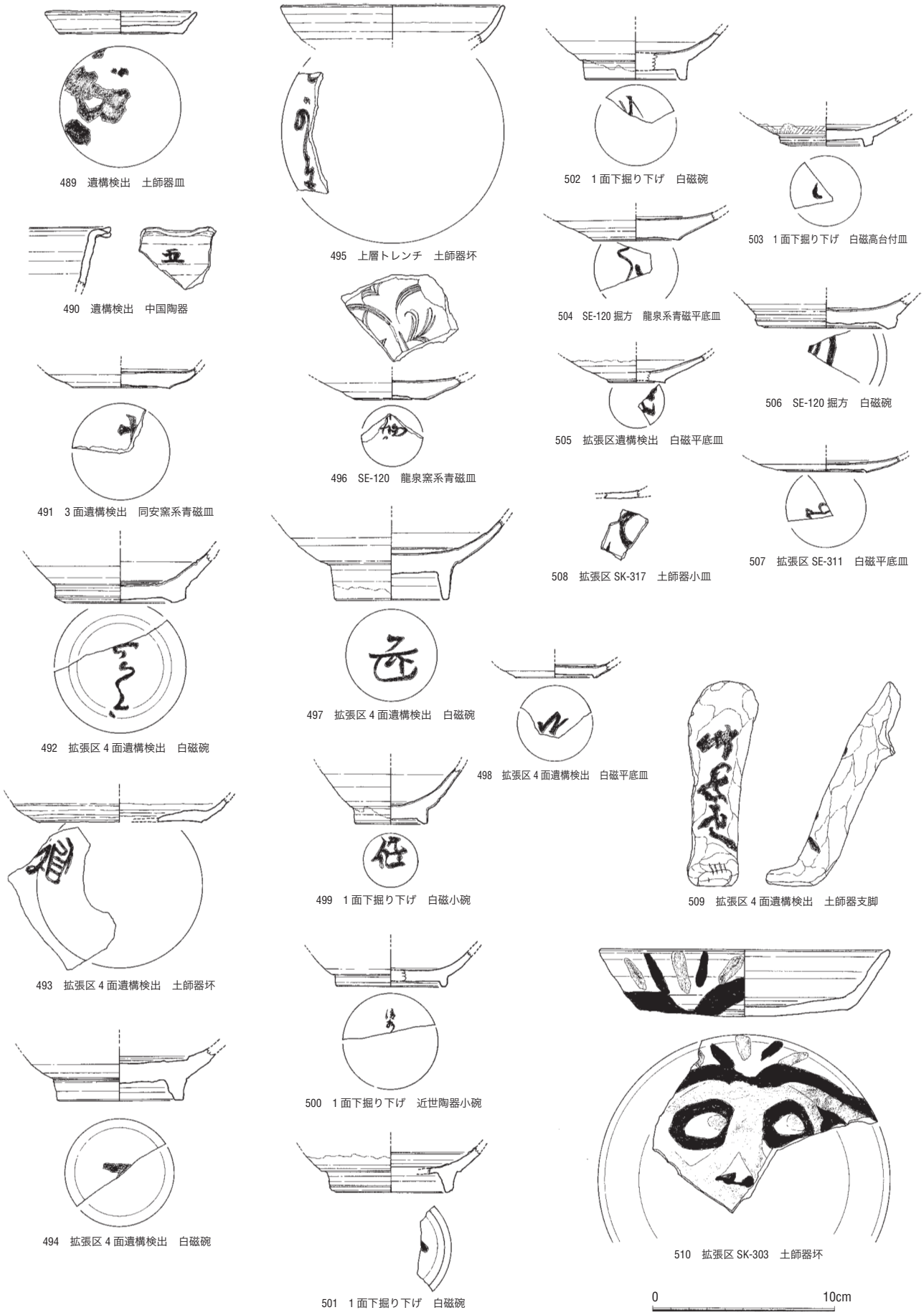


Fig.60　墨書土器実測図4（S＝1／3）

d．銅銭（Fig-61）

第145次調査では、総数74枚の銅銭が出土している。このうち32枚については遺構面の掘り下げ時に出土し、41枚については遺構から出土した。特に拡張部南側で検出された13世紀代のSE-300からは22枚の銅銭が出土し、うち19枚は井筒底部から投棄された状態で検出された。井戸廃絶時の祭祀に伴って投げ入れられたものと考えられ、出土した銅銭は五銖銭から嘉靖通寶と多岐にわたる。

銅銭の多くは、出土時には錆に覆われ判読できない状態であったため、福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏の協力により、錆落としを行い判読不能な銅銭についてはX線による判読を行っていただいた。なお、第2面下掘り下げ時に4～5枚の銅銭が錆により接合した状態で出土した。いずれの銅銭も腐食により強度が著しく落ちていたため剥離による破損が考えられたため、判読は断念した。

出土した銅銭74枚のうち、43枚については判読可能であり、判読結果よりTab.1西暦別出土銅銭一覧表、Tab.2遺構別出土銅銭一覧表を作成した。SE-300出土の銅銭以外は、出土遺構や銅銭の時期については、特に傾向はなく、多くが遺失銭という状況である。

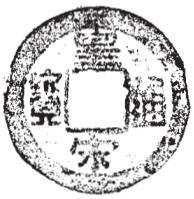
銭貨名	西暦	朝名	初鋳年	枚数	銭貨名	西暦	朝名	初鋳年	枚数
五銖	前118	前漢	元狩５年	1	元祐通寶	1086	北宋	元祐元年	1
開元通寶	621	唐	武徳４年	1	紹聖通寶	1094	北宋	紹聖元年	1
太平通寶	976	北宋	太平興国元年	1	崇寧通寶	1102	北宋	崇寧元年	1
祥符通寶	1002	北宋	大中祥符２年	5	政和通寶	1111	北宋	政和元年	1
景徳元寶	1004	北宋	景徳元年	1	開禧通寶	1205	南宋	開禧元年	1
祥符元寶	1009	北宋	大中祥符元年	4	嘉定通寶	1208	南宋	嘉定元年	1
天禧通寶	1017	北宋	天禧元年	3	洪武通寶	1368	明	洪武元年	1
天聖元寶	1023	北宋	天聖元年	3	永楽通寶	1408	明	永楽６年	3
明道元寶	1032	北宋	明道元年	1	宣徳通寶	1433	明	宣徳８年	2
景祐元寶	1034	北宋	景祐元年	1	嘉靖通寶	1527	明	嘉靖６年	1
皇宋通寶	1038	北宋	寶元元年	5	□□通寶				1
至和元寶	1054	北宋	至和元年	1	祥□□寶				1
嘉祐元寶	1056	北宋	嘉祐元年	2	天□□□				1
熙寧元寶	1068	北宋	熙寧元年	3	判読不明				24
元豊通寶	1078	北宋	元豊元年	2	計				74

Tab.1　西暦別出土銅銭一覧表

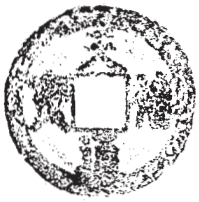
遺構種別	遺構面	出土地点	銭貨名	西暦	朝名	初鋳年	枚数	遺構種別	遺構面	出土地点	銭貨名	西暦	朝名	初鋳年	枚数
SK-018	1		開禧通寶	1205	南宋	開禧元年	1		4	井筒最下層	嘉祐元寶	1056	北宋	嘉祐元年	1
	1		皇宋通寶	1038	北宋	寶元元年	1		4	井筒最下層	元豊通寶	1078	北宋	元豊元年	1
SE-068	1	掘方掘り下げ	判読不明				1		4	井筒最下層	政和通寶	1111	北宋	政和元年	1
	1		判読不明				1	SE-300	3	検出時	宣徳通寶	1433	明	宣徳８年	1
SE-072	1	掘方掘り下げ	太平通寶	976	北宋	太平興国元年	1		3	検出時	嘉靖通寶	1527	明	嘉靖６年	1
SK-081	1		天禧通寶	1017	北宋	天禧元年	1		4	掘方掘り下げ	判読不明				1
SK-099	2		皇宋通寶	1038	北宋	寶元元年	1	SK-337	4		判読不明				1
SX-107	2		天聖元寶	1023	北宋	天聖元年	1		1	１面掘り下げSE-067付近	崇寧通寶	1102	北宋	崇寧元年	1
SE-119	3	掘方掘り下げ	元祐通寶	1086	北宋	元祐元年	1		1	１面掘り下げ	熙寧元寶	1068	北宋	熙寧元年	1
SE-120	3	井筒掘り下げ	□□通寶				1		1	１面掘り下げ	宣徳通寶	1433	明	宣徳８年	1
	3	井筒最下層	開元通寶	621	唐	武徳４年	1		2	２面下掘り下げ	嘉定通寶	1208	南宋	嘉定元年	1
	3	掘方掘り下げ	祥符元寶	1009	北宋	大中祥符元年	1		2	２面下掘り下げ	永楽通寶	1408	明	永楽６年	2
SE-125	3	掘方掘り下げ	天禧通寶	1017	北宋	天禧元年	1		2	拡張区２～３面掘り下げ	元豊通寶	1078	北宋	元豊元年	1
	3	掘方掘り下げ	紹聖通寶	1094	北宋	紹聖元年	1		1	１面下掘り下げ	祥符元寶	1009	北宋	大中祥符元年	1
	3	掘方掘り下げ	洪武通寶	1368	明	洪武元年	1		1	１面下掘り下げ	皇宋通寶	1038	北宋	寶元元年	1
SK-126	3		判読不明				1		1	１面下掘り下げ	嘉祐通寶	1056	北宋	嘉祐元年	1
	3		天□□□				1	包含層	1	１面下掘り下げ	判読不明				4
SE-225	3		判読不明				1		1	１面下掘り下げSE-067周辺	聖□□寶				1
	3	井筒最下層	五銖	前118	前漢	元狩５年	1		2	２面下掘り下げ	熙寧元寶	1068	北宋	熙寧元年	2
	4	井筒最下層	祥符通寶	1002	北宋	大中祥符２年	4		2	２面下掘り下げ	永楽通寶	1408	明	永楽６年	1
	4	井筒最下層	景徳元寶	1004	北宋	景徳元年	1		2	２面下掘り下げ	祥□□寶				1
	4	井筒最下層	祥符元寶	1009	北宋	大中祥符元年	3		2	２面下掘り下げ	判読不明				4
SE-300	4	井筒最下層	天禧通寶	1017	北宋	天禧元年	1		2	２面下掘り下げSE-072周辺	判読不明				1
	4	井筒最下層	天聖元寶	1023	北宋	天聖元年	2		2	２面下掘り下げ・61接合	皇宋通寶	1038	北宋	寶元元年	1
	4	井筒最下層	明道元寶	1032	北宋	明道元年	1		2	２面下掘り下げ・61接合	判読不明				3
	4	井筒最下層	景祐元寶	1034	北宋	景祐元年	1		2	２面下掘り下げ・62接合	判読不明				5
	4	井筒最下層	皇宋通寶	1038	北宋	寶元元年	1	計							74
	4	井筒最下層	至和元寶	1054	北宋	至和元年	1								

Tab.2　遺構別出土銅銭一覧表

開禧通寶
SK-018



皇宋通寶
SE-068



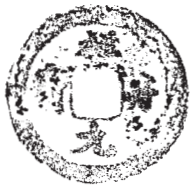
天禧通寶
SK-081

天禧通寶
SE-125　掘方掘り下げ

五銖
SE-300　井筒最下層

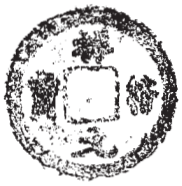
祥符通寶
SE-300　井筒最下層

祥符通寶
SE-300　井筒最下層



祥符元寶
SE-300　井筒最下層

祥符元寶
SE-300　井筒最下層



祥符元寶
SE-300　井筒最下層

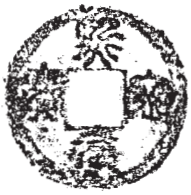
天禧通寶
SE-300　井筒最下層

明道元寶
SE-300　井筒最下層

嘉祐元寶
SE-300　井筒最下層

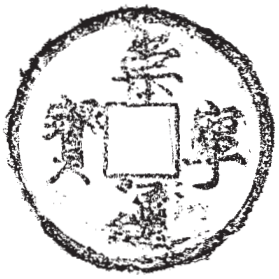
政和通寶
SE-300　井筒最下層

宣德通寶
SE-300　井筒最下層



熙寧元寶
包含層　1面掘り下げ

宣德通寶
包含層　1面掘り下げ



崇寧通寶
包含層　1面掘り下げSE-068付近

嘉定通寶
包含層　2面下掘り下げ

永楽通寶
包含層　2面下掘り下げ

Fig.61　銅銭（S＝1／1）

第三章　まとめ

以上簡単ではあるが、検出遺構、出土遺物についての説明を行ってきた。最後に第145次調査の簡単なまとめを行いたい。

本調査地点で検出された遺構の初現は古代である。検出された遺構は竪穴住居の可能性が考えられる方形土坑のみであるが、掘り下げ時に古代に属する須恵器などの遺物が多量に出土していることから該期には集落域の一部であったことが分かる。これまでの調査成果からは古代の時期には博多浜北東側に区画溝を伴う集落が展開することが明らかとされ、博多浜南部域では官衙関連施設が存在していたことが推測されている。

本調査での古代以前の遺構は、中世段階の井戸掘削により失われており検出されなかったが、遺物としては弥生土器甕や古式土師器が多数出土している。また、隣接する第88次調査では弥生後期後半の甕棺墓3基が検出されていることから、砂丘北側斜面上の本調査区付近が弥生時代後期から墓域としての利用が開始されたことが分かる。

古代の遺構は前述の通り、住居の可能性が考えられる土坑のみであるが、現在の御供所通り沿いで行われた調査成果からは区画溝に画された範囲内に集落が営まれていることが推測されており、今回の調査成果もこの推測を裏付けるものであろう。この御供所通りで検出される区画は、古代以来中世後半まで存続することが調査成果より知られている。

中世中頃以降の時期には、本調査区は聖福寺の築地塀西側に展開する門前町の範囲内に含まれている。これまでの博多遺跡群の調査で検出された道路遺構より復元される中世後半期の街区推定図からは、本調査区は最大で150ｍ×100ｍ程度の長方形街区内に含まれており、この街区内の中央部北側付近の一角に位置しているものと考えられる。中世中頃から後半の時期に当たる第2面・第3面で検出された遺構の多くは、この街区方向に沿うような方位で検出されるものが多く見られ、街区に影響された建物配置の規格性が存在していたことが伺えよう。調査区内では、丁寧な整地が北側に集中して行われ、井戸は集中して繰り返し造営されている。整地層が検出された調査区北半部には、饗宴の際に投棄された土師器や完形の白磁碗などが大量に出土する廃棄土坑が集中して検出されることから、屋敷地内の庭等の空間にあたるものと推測される。

太閤町割以後は整然とした長方形街区と短冊形区画を採るが、中世中頃の区画の詳細については不明な点が多い。本調査では区画の境界を示す遺構の検出はなく、区画・建物配置などは判然としないが、出土遺物等の成果より若干の推測を行いたい。拡張区第3面で検出されたSK-303出土の獅子瓦は、中世の日本建築様式では設置箇所や用途について説明できない形態の瓦である。遺構の時期は12世紀前半代と考えられ、この時期は宋商人らの活動が活発な時期であることなどを考慮して、宋商人らの居住域に建築された中国様式の建物上部構造に使用されたものと考えられる。出土する貿易陶磁等の遺物や廃棄土坑内に完形の白磁碗などが含まれることからも、他の街区で検出される遺構群とはやや異なる様相が見られる。限られた範囲内での調査であるため推測の域を出ないが、宋商人の居住域としての可能性が考えられよう。

以上、本調査の簡単なまとめを行った。今後の調査で、都市「博多」がより一層解明されることに期待したい。

報　告　書　抄　録

書　　名	博多105　（はかた105）		
副　書　名	博多遺跡群第145次調査報告		
巻　　次			
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	第851集		
編集者名	本田浩二郎		
発行機関	福岡市教育委員会		
所　在　地	〒810-8621　福岡市中央区天神1-8-1　　TEL 092-711-4667		
発行年月日	2005（平成17）年３月31日		
調査期間	2003. 09. 03 ～ 2003. 12. 05		
調査面積	250㎡		
調査原因	共同住宅建設		
所収遺跡名	博多遺跡群　（はかたいせきぐん）		
所　在　地	福岡県福岡市博多区御供所町313-2		
市町村コード	40132	遺跡番号	0121
北　　緯	33°35′25″	東　　経	130°24′56″
種　　別	集　落	主な時代	古代／中世
主な遺構	井戸12／土坑／建物基礎遺構／		
主な遺物	弥生土器／古式土師器／土師器／須恵器／貿易陶磁器／国産陶器／銅銭など		
特記事項	猿面の彩色墨書土器・獅子瓦が出土		

博　多　105

福岡市埋蔵文化財調査報告書第851集
博多遺跡群第145次調査報告
2005年３月31日発行

発　行　福岡市教育委員会
印　刷　㈱タマキ印刷